
魔法少女リリカルなのは 純 姫 番外特集 ♪

キャビア伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 純 姫 番外特集♪

【Nコード】

N7406T

【作者名】

キャビア伯爵

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのは 純白の騎士姫の番外特集！

聖祥学園の学園祭で起こった出来事？
アリアとシグナムの結婚式？

そして・・・

まさかのあの子とアリアのIFカップリングまで!?

日常で起きる些細なことから起きた事件に・・・

「あつたかもしれない」エピソード。

そして・・・

アリアに思いを伝える事を諦めた、とある少女の悲しいエピソードも。

全部ぜえええええゝゝんぶ見せちゃいます!

さあ、番外編が始まるよっ 三

番外編を読むにあたって。

やつほっほ！ キャビア伯爵です！

本編が予想より長くなり、番外編は別口で投稿することにしました♪

えっとこの番外編の内容はリクエストも募集していますよ！

今のところリクエストが出てるのは・・・。

『熟女キャラとアリアのIFカップリング、

なのはIFルート、ヴィータIFルート、スバルIFルート。

（→は一部後日談的な形で。）

他作者様とのコラボとかアリアの過去。』

このくらいでしょうか。

本編の話数がめっちゃ多くなるので、

空白期にやろうと思ってたネタ等はこちらでやるかもよ・・・？

ではまずは、記念すべき番外編、第一弾！

「聖祥学園学園祭ー）バンドやりましょ ミー」

・・・の、執筆に取り掛かりますwww

概要としては、まあ学園祭でバンドやります！

メンバーは言わずもがな。ですがバンドだけじゃありません。

ちょっと悲しい恋愛模様が入るかもよ！

お楽しみに！

キャビア伯爵でした！

番外リクエスト受け付けてます。

あんまりぶっ飛んだものじゃなければ大丈夫。

なるだけ書けるようにしますw

んでは、再見w

今、私は恋をしている。

今見ているのは、その、原因。

私の想ってる人が、まるで……。

「おい。このガキはどうしろって？」

「聞いて驚くなよ？……好きにしていってよー！」

「まじかよ！　じゃあじゃあ俺一番でいいっ！？」

「なにお前そういう趣味かよwww」

「んじゃ、俺この子ヤツちやいまーす！」

「ぎゃははははー！　行ってきやがれ変態ー！」

「いや……来ないで……。」「

「下着だけつてのがソソるよねえー……………」

「助けて、よぉ……アリアぁ……。」

「はははは！ 誰も来ないよぉー！ ぎゃははは……………」

『Yes, Your Highness』

「…………アリア…………？」

「…………助けに来たよ。アリサ。」

私を助けてくれた、勇者みたいで。

うん。こんな考えが似合わないのはわかってる。

あいつにとって私は、いいケンカ相手……かな……？

本当にちょっとしたことでいじられてる気がする。

・・・でも。

「ねえ、ノート落としたよ？」

「あ、俺が運ぶよ。いくらアリサでも大変だろ？」

「ん？ このおかず？ 今度作ってこようか？」

「よし。今日はアリサへ歌を贈ろうかな。気分もいいし♪」

「怪我無い・・・？ そっか。アリサは強いんだね・・・。」

「アリサの家の犬・・・可愛い。」

「うん？ ・・・歌うのは大好き。」

「ね！ 今度一緒に演奏しない？ バイオリンとピアノで！」

時折見せる優しさと無邪気さが、なんだか嬉しくて。

好きだ。あいつが。

だけど、もう思いを伝えられなくて・・・もう、5年かな。

あいつとの距離感が崩れるのが怖くて。

想いを伝えて、なのはやフェイトやはやてやすずかとの関係が崩れるのが怖くて。

みんなあいつが好きなのはわかってた。

4人全員から相談を受けてたから。

・・・そう、5年だ。

・・・そして今、時間切れ・・・なのかもしれない。

私の視線の先には、ピンクのポニーテールの女の人が居て。

その隣に、その女の人に腕を組む・・・あいつ。

見てるところは、商店街にある宝石店。

熱心に・・・ペアリングを、見ていた・・・。

ああ、ポニーテールの人は見たことがある。

はやての親戚のお姉さんだ。やはり、魔法関係の人らしいけど。

でも、前に「おめでた」でしばらく会えないってはやてから聞いた・
・

・・・その時に浮かべた微妙な笑みの意味がわかってしまった。

「シグナム、どれがいい？」

「・・・うむ・・・この意匠を凝らしたリングはどうだ？」

「うん。俺達の子も無事に生まれて、あとは結婚か。」

・・・ああ。

「式はアリアが成人してからか・・・」

「うん、シグナム・・・楽しみ？」

あいつ、誰よりも大人だったけど・・・

「そうだな。アリアとの永遠の誓いを建てれるなら・・・」

「そ、そんな・・・まあ、いいけど／＼／」

そっか。もう、時間切れなんだね・・・。

中学校に来なくなるって言ってたのは・・・そっ、子育て、か。

あいつらしいといえば・・・そうかな・・・？

・・・だけど、この想いはどうしよう・・・。

そつだ閉じておこつ。フタをしておこつ。

私が伝えても、あいつが困るだけじゃないか。

私は身を引こつ。

でも・・・思ひ出くらい、作っても・・・いいよね。

自然に思い出作り・・・あ、学園祭がある・・・

あいつと私が共通して好きなこと・・・音楽・・・。

バンド、かな？

あいつがキーボードとボーカル、

すずかがサイドボーカル。

私がリードギター。

なのはがサイドギター。

フェイトがベース。

はやてがドラム。

「なによ。完璧じゃない・・・。」

私は宝石店の二人から目を逸らして、家への帰り道を急ぐ。

そう、思い出を・・・

「アリア、待ってなさいよ・・・。」

最後の思い出を作る為に。

私立聖祥学園中等部。2年2組。

あいつはいつもどおり、教室へ入ってきた。

「アリア、おはよう!」

「おう、アリス・・・おお? 誰・・・?」

「アリスよ?」

「いや・・・髪の毛、バツサリ切ったね・・・。」

どう? 可愛い?

「なによ、悪い?」

「いや、なんでもないよ。」

ああ、まただ。だから私は・・・。

そんな自己嫌悪をしていると、フェイトとなのはも遅れて教室へ。

すずかは一番最後だ。

・・・よし、このタイミングだ。

「バニングス組！ 集合！」

すると、4人が何かあるのか？ という視線で私の元へ。
はやても6組からダッシュでやってくる。

「今集めたのは他でも無い、重要な案件よ。」

「アリサちゃん、どうしたの？」

「今度の学園祭・・・。」

.....バンッッ！！

机を大きく叩き、一言。

「バンド、やりましょっ！」

あいつの・・・アリアの間の抜けた顔が面白かった。

ふふっ・・・ばーか♪

聖祥学園学園祭——バンドやりましょ—— 1（後書き）

さあ始まりました。

アリアが視点の基本になります。

ラストは・・・。

思わず自分でも泣いちゃいました。

続きをお楽しみにw

秋が来た。

この聖祥学園中等部では学園祭が催される。

このすぐあとは、各学年の「修学旅行」も控えていて、

いわゆる・・・テンションをハイに保ったまま修学旅行に行こう！

という感じ・・・なのだが・・・。

それで収まらないのが聖祥学園。

修学旅行に向けた前菜とは捉えず、しっかり楽しもうという心が見える。

特に、大会等で修学旅行に行けない運動部などが出店などで大きな収入を得ている。

ちなみに、俺達2学年の旅行先は京都だ。

そして、出し物は……。

「今年の2組の出し物はメイド喫茶をやる訳ですが……。」

うん。まあ予想できた。だってここすごい美少女揃いだしね。

投票数もぶっちぎりだった。ん？ 俺？ もちろんメイド喫茶に入れたよ♪

俺達『バニングス組』の女子達は渋ってたけど……。

「俺もメイド喫茶に投票したけど？」

って話をしたら二言目にはやるといいだした……。

流石、バニングス組の結束力……。

ちなみになのはとフェイトは任務で途中欠席だ。

まあ、すでに設営も始まっている。

だけど委員長のすずかはクラス全員を集めて言った。

「メイド服の調達が間に合わないんです……。」「

「「「「ええええええつつー!!?」「「「「「

おお……。死活問題じゃないか……。

「やっぱりメイド服は経費で落ちなくて……。」「

「「「「うつわぁ……。」「「「「

「許可出すのは誰だっけ？ すずか。」「

アリサが立ち上がって聞いたです。

「それが・・・教務の笹塚先生で・・・。」

「・・・あんのゴリラ・・・。」

笹塚先生とは超堅物の先生で、何かと俺達にケチつけてくる先生だ。

よく学校を休むのはとフェイトとはやてを目の敵にし、

令嬢のすずかや、バニングス組のリーダーのアリサ、

・・・俺はまあ・・・色々あつたんだw

・・・を、含めたバニングス組etcをマークしてる先生。

しかも彼が落としたUSBメモリには、

高校生モノのAVが入ってたりと・・・とにかく史上最悪な先生である。

そんな先生の名前が出てきて、運動部の多いこの教室はざわめく。

あわあわとなるすずかに俺は助け舟を出した。

アイテムクリエイション使ったらよーよー。

そして、メイド服と執事服は各自プレゼントする。というところ。。。

「流石バニングス組！」

「いや・・・流石にバニングス組の主夫って言われてるだけあるよなw」

「バニングス組ってこんな事もやるのか・・・。」

そんな中で、さすがだけが心配そうな目を向ける。

「本当に大丈夫？」

「うん。頑張るよ・・・って頑張るって言ったら俺ってたいいていの事は成し遂げてるよ。」

「頑張んなさいよ？・・・魔法？」

最初のほうは挑発的に。最後のほうはこそそとアリサが聞いてくる。

この二人には、俺「達」の事をちゃんと話してある。

・・・無論、闇の書の事も、俺が一回死んだという事も。

ジュエルシードについては知らないけどw

「うん、クリエイトすればいくらでも。

あ、アリサ・・・女子のサイズとか後で測って提出してくんない？」

「そのくらいお安い御用よ」

「むお？」

「な、なによ呆けた顔して。」

「いや・・・なんでもない。頼んだ。」

「了解よ。」

・・・最近アリサが素直って言うか・・・。

なんだろ、なんか優しくなったんだよね・・・。

まあそれは置いておいて・・・。

そのあとは特に問題もなく会議は終了。

・・・学園祭まであと三日である。

え？ バンドの曲目？

ええーつと・・・ペルソナ3より『キミの記憶』だな。

理由は・・・。

4ヶ月前・・・。

ハラオウン家、リビング。時は夕暮れ。

「ねえねえ、あの時、シグナムさんが歌ってた歌って？」

なのはが紅茶を用意しながら俺に聞く。

「あの時？・・・ああー・・・。」

俺が消えた時だからキミの記憶か。

「キミの記憶って歌だよ。ああ、俺の譜面ね。」

「綺麗な歌だったねえ・・・。」

「せやな。兄ちゃんがうちと一緒に寝てた時はこれが子守唄やった。」

「アリア君が歌うと、もっと綺麗な歌になると思うな。」

という流れで決定。

ちなみに、音楽室で練習してたらブラスバンド部が乱入。

ブラスバンド版のキミの記憶になったwww

本番でもブラスバンドの人達にお願いして、

ライブ版のキミの記憶を演奏する予定だ。

ブラバン側の全員の自主練習も腰が入ってるみたいだしね。

あとは・・・

さすがに「紛争地帯の悲しさ」がどうこうって珍しく俺に語ってくれた日があったんだ。

まあ、話の流れでね。で、今の平和がいかにして贅沢なものなのかわかってもらう為に、

二曲目はゾイドより『夜鷹の夢』にその場で決定。

三曲目は全力熱唱、マクロスFより『星間飛行』

え？ マクロスは歌わないとダメだろwww学園祭なんだしwww

練習中に「キラッ ミ」ってやったら、

練習を見に来てた守護騎士達とハラウン家の皆が真っ赤になった。

・・・うん。破壊力満点だ。本番にもやろっかな♪

——俺は後日、この事を後悔することになるとは思っても見なかった。

順番的には・・・

一曲目 キミの記憶 ブラスバンド+

二曲目 夜鷹の夢

三曲目 星間飛行 ってトコかな？

あ、あと俺を抜いて、アリサをボーカルにした練習をやってるらしい。

・・・らしいというのは、俺をハブってるからだw

みんないわく、俺をビックリさせてやるとかなんとか言ってたけど・・・。

俺の机においてある譜面のファイルと、

セイバーリリイ用のメモリの場所が変わってたので、

きつと俺の世界の曲をやるんだろう。

ビックリさせてくれるのが楽しみだ。

そう考えて教室を出ようとすると・・・。

「ねえ、アリア。」

「・・・ん？ なに？ アリサ。」

「えつと・・・。」

アリサが俺の上着の裾を掴み、引き止められた。

なんだろ。

「どうしたよ。お手伝い？」

「い、いや、違うわ、そうじゃなくて・・・。」

「・・・？」

「あ、あなた、学園祭誰と回るか決まってるの？」

と、何故か泣きそうな顔で言われてしまった。

決まって無いけど・・・何故泣きそうになってるんだっ！？

シグナムには来るなって言ってるあるしねw

・・・俺が男子から処刑されるしw

「いや？ 決まってるない。」

「えっ！？」

アリサ達にはシグナムとの恋仲を話してない。

・・・話すのは俺が修学旅行を終えて、退学するまでだ。

「・・・そんな驚くなよ・・・。」

「あ、ああ！ 別にそんなんじゃないけど・・・。」

「・・・あー。」

そういう事か。

まあ、最近優しくなってきたし、アリサと遊ぶってのもいいかもしれない。

「アリサ、俺と学園祭回らない？」

「・・・ふえっ？」

ま、たまにはいいか。

俺はぽかんとしてるアリサを見て、小さく息を吐いた。

聖祥学園学園祭ー〓バンドやりましょ 〓〓 2 (後書き)

あれ？

修学旅行が出てきましたね・・・w

アリサ、頑張れwww

バニングス組については、次話で説明します♪

聖祥学園学園祭——バンドやりましょ—— 3 (前書き)

お待たせしました!!

本当のリリカルなのはの設定では、

聖祥大付属・・・となっていて、女子部・・・のようなのですが、

これに登場する学校は『聖祥学園』です・・・。

完全にオリ設定となっているので、読む場合はお気をつけ下さい。

作者が注意書きを失念していました。

申し訳ありません・・・。

では、どうぞ。

バニングス組。

生徒会副会長、『組長』アリサ・バニングスを筆頭に、

2年2組クラス委員長、『副長』月村すずか、

風紀委員、『魔王』高町なのは、

風紀委員、『死神』フェイト・T・ハラオウン、

風紀委員、『軍師』八神はやて・・・。

そして、『^{ビショップ}法王』と呼ばれる、

風紀委員副会長、俺ことアリアの6人で構成された・・・。

『学園の風紀を守り、かつ生徒全員の楽しく快適な学園生活を保障する』

と、いうグループである。

要するに、イベントを超盛り上げて、かつ風紀の取り締まりみたいな感じだ。

バニングス組に動いてもらうには・・・ふ・・・

んあっ！

・・・あ、なんでも、ないよ・・・？

ふ、風紀委員会の部屋の外にある・・・

「すずかちゃん ご意見箱」

に意見を書いて入れないといけないというのが・・・は、あん・・・

あるんだけ・・・ど・・・んっ・・・

そ、その辺は・・・割愛する。

『教師陣』『生徒会』『運動部』はお互い対立しあっている。

もちろん、小学校を除い・・・ひゃあんっ！

・・・の・・・除いた・・・中学、高校、大学、の三つ分の、だ。

ちなみに、バニングス組は『生徒会』・・・は、ああんっ・・・の傘下だ。

今回での学園祭での俺の、よ、んっ・・・予定は・・・。

午前中、メ、メイド・・・うあっ・・・メイド喫茶の、執事役。

午後は、アリサと警備って言う名前の学園祭巡っ・・・く、あんっ！

ちよ、痛い・・・・・・・・・・学園祭巡り、だよ・・・。

無事にメイド服は間に合い、後は翌日の本番を待つだけだ。

「う．．．んっ．．．。」

「ちゅ．．．ちゅっ．．．ぺろぺろ．．．。」

「っひゃんっ！！／／／」

「．．．ふふっ．．．ぢゅ．．．ぢゅうっうっ！ー！！」

「んっ．．．ふぁ、くぁ．．．ぁぁ．．．ぁぁぁぁぁぁぁあっつ
！！」

うん、現実逃避してました．．．。

「．．．アリアも胸だけで果てるなど．．．弛んでるな。」

「シグナムが．．．沢山．．．吸う、から．．．っ」

「アリアの敏感な所など全部知っている。」

．．．明日は後夜祭以外来てはいけないと言ったのだからな。存
分に付き合ってもらうぞ。」

現時刻、PM 8時。．．．12時ごろには、寝れるといいな．．．。

ああ、アルフォンス、おとーさんは学園祭の前に燃え尽きるかも．．

・。

「ばぶうー」

と、「頑張れ」って言ってそうな声が、隣室から聞こえた。

「今日、本番だね！」

俺が星間飛行を歌う時、代わりにピアノをやってくれるすがが、譜面をしまいながら言った。

今日は早起きして集合、曲を合わせると・・・中々の出来なんだな。
うん。

「今から緊張するよう・・・。」

「なのは、今から緊張したら身がもたんで？」

「はやての言うとおりだよ・・・なのは達はメイドさんもやるんだしね。」

「そついうあんたは執事じゃない。」

たかが給仕だしなあ・・・。

「いつもどおり頑張る。」

「はあ・・・張り切るのはいいけど、

午後は・・・ちゃんと来なさいよね。」

「「「「・・・」」」」

今ここに・・・4人の修羅が・・・。

「アリア君、私のお誘い断ったよね？」

「アリア・・・私の誘いも断ったよね？」

「アリア君・・・はあ・・・。」

「兄ちゃん・・・理由を改めて教えてくれんか？」

八神家

「だ、ダメよシグナム！ 来ちゃダメって言われて・・・！」

「放せシャル！ 私はアリアを守りに行かないといけないんだあ
あああ！！！！」

「ま、あたしは行けるからいいけどな。」

「えへへー。私もですう！」

「おのれヴィータあああああああああああああああ！！！！
！！！！」

「リインはっ！？」

「あぶう・・・えぐ・・・ばぶう・・・（泣）」

「・・・うるさいぞ、シグナム。（アルに高い高い。」

「す、すまんザフィーラ・・・。」

「きゃっきゃっ！（笑）」

「すげーナチュラルに子守してんなザフィーラ。」

「・・・守護獣だからな。」

「関係ないと思うです・・・（汗）」

「とにかく！ 私は行くぞー！！」

「アリアが6年生の時の演劇の時もそうだったじゃねえか！！

お前めっちゃ怒られたの忘れたのかよー！！」

「反省はしてるが後悔はしていない！

・・・ああ、あの時のアリアは格好良かったなあ・・・。」

「ダメだこいつ早く何とかしないと・・・。」

「行く！ 私は行くぞー！」

「・・・はあ、好きにしろよ。一緒に行くのか？」

「ああ。」

「じゃあ準備するですう！ 人数は多いほうが楽しいですう！」

「私とザフィーラはアルの面倒を見てるわね？」

「すまないが頼めるか？」

「・・・無論だ。」

「もちろん♪」

「アルフォンス、おかーさんはお出かけしてくるぞ。

．．．今日は許してくれるか．．．？」

「ばぶう！」

—— キュピーン！（超笑顔でサムズアップ

「．．．うむ、行ってくるぞ息子よ！」

「ぶ．．．ぶ．．．ぶ．．．だああー！！！」

「ダアアアア——！！！！！」

—— ガッシャアアアアン！！（窓ガラスを突き破りシ
グナムお出かけ。

八神家は今日も・・・平和・・・？

聖祥学園学園祭——バンドやりましょ
ミミ 3 (後書き)

嫉妬パワー・・・恐ろしす・・・。

次回、執事&アリサとのデート！

聖祥学園学園祭〜バンドやりましょ
ミミ 4 (前書き)

あれ・・・？

バンドの話・・・少なくね・・・？w

に、日常編ですから！ ですから！w w

アリサ「ジト・・・。」

Σ!!!

「……うわぁぁ……。」

開店前、ホールに出る少ない男子と多数の女子の黄色い歓声を浴びる。

「あ、あ、ありあくん……めがねにあいすぎなの……。」

「たかまっちゃん、鼻から愛が溢れてるよ。」

「仕方ないで。こんな兄ちゃん見たら。（だくだく）」

「そういうはやてちゃん、お前はなのは以上に生命の危険があるよ。」

「

今の服装は……。

執事服なズボンに、長袖のYシャツ、黒いベストに赤いリボン。

髪型を……本家のように三つ編み団子。

そして、赤い縁のメガネをかけている。

「ま、中々似合ってるよ、あーちゃん。」

数多くの、なのはたちの「経典」となっている本の著者……らしい。

よくわかんないけど、乙女のばいぶる。ってやつだろうか。

ちなみに、俺と同じく「陸の英雄」視もされている。

「机に向かつてる時のあーちゃんの銀縁のメガネもいいけど……。」

「可愛いね……可愛いね……アリア……はあはあ。」

「フェ、フェイトちゃん、落ち着いて……。」

そんなアイドルたちの言葉に触発されたのか。

「アリア君うちで執事やってくれないかなー。」

「温和なアリア君に赤メガネ……ありね……。」

「き、禁断の執事プレイ……。」

「メイドじゃなくて執事……健気っ子……。」

「銀のトレーで一生懸命重いものを……。」

「アリアきゅんアリアきゅんハアハアハアハア・・・つつ」

もお・・・俺って何着てもやっぱり女の子に見えるのだろうか。

「ってか!! さ、最後の誰っ!？」

「商売繁盛頑張るぞー!!」

「「「「おーーーーー!!」」」」

「トツキーもスルーして号令しないでよおおお!!」

「あ、最後のは俺だぞ、あーちゃん。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「おねがいします・・・／＼／」

高校の先輩を客席に案内し、テーブルの脇にそっと立つ。

「ね、ねえ、君・・・執事君よね？」

「その通りでございます。お嬢様。」

「名前を聞かせてもらってもよろしいかしら？」

ふむ。ノリのいい人は好きだぞ俺。

「失礼ながら、アルトリア・ムーンライト・八神です。」

「・・・え？ あ、君が法王！」

「そうとも呼ばれていますが・・・ここでは執事です。」

なんなりと、ご命令をお申し付け下さい。」

ここでは雰囲気を出す為に、料金は前払いで食べ放題だ。

・・・学園祭で食べ放題ができるほどの資材・・・突っ込まないぞ俺は。

厨房の人達はすごくキツツイとか言いながらも、

ハイクラスのお菓子や飲み物を作り続けている。

「そう・・・じゃ、じゃあ・・・あなたのオススメの物を。」

「かしこまりました。ご期待に沿えるように頑張ります。」（ニコッ）

「・・・（ぼふっ！！／／／／／／）」

その直後、この会話を誰かが聞いていたのか、

ヤンデレメイドが何人か光臨したという。

side 烈火のお姉ちゃん

「・・・ここか。」

「・・・みてえだな。」

「楽しみですう！」

「2年2組だそうだ。早く行くぞ。」

「出し物なんだっけかりん。」

「えつとお・・・確か・・・メイド喫茶ですう！」

「・・・なん・・・だと・・・？」

「男の子は執事だそうですう♪ 楽しみですう！」

「てか男ってことは・・・綾時もあるんじゃないのか？」

「・・・ほう。あいつか。」

「ま、あたしもあいつにゃ世話になったしな。行くか。」

「そうだな。」

「ですう！」

「待ってるよアリアあああああああ！！」

「「シャウトしなくていいから！！」ですう！！」

聖祥学園学園祭ーくバンドやりましょ ミく 4（後書き）

名前 鳳凰院 綾時

ほうおういん・あやとき

愛称 トッキー。

魔王とか、死神とか、

そんな二つ名は『絶影の鳳凰院』

階級： 陸士109部隊付き戦技教導官

年齢： 19歳。（新暦75年4月27日時点）

性別： 男、FF5よりバツ君。

魔術術式： 近代ベルカ式／空戦sランクノ

デバイス： 片手剣型『アイーシャ』

魔力総量： E - (登録上は)

所持資格： 戦技教導資格/ミッドチルダ自動二輪免許

特殊種族： 特に・・・無し・・・？

トツキー様、ご登場させていただきました。

今、彼の戦闘場面のプロットを作ってたんですが。

敵「銀の魔力光怖い銀怖い銀怖い銀怖い・・・。」

だそうです。

基本、番外編での主力キャラになるかもっ！？

アリアの男友達です。修学旅行や、他の場面でも出てくるかも。

では、失礼っ！



妄想爆発プロジェクト！ そうだ。海へ行こう。（前書き）

S U - 3 7 J さんによる記念すべき妄想爆発プロジェクトの第一回目！

割り込み投稿式で更新していききたいと思います。

見にくいかも知れませんがご容赦を・・・。

↑についてはシッコミは無しね！ W W W

妄想爆発プロジェクト！　そうだ。海へ行こう。

それは俺がみんなの元へ帰ってきて初めての夏のことだった。

ようやく闇の所持件の事後処理も済み平穏な生活に戻れると思っていた……。

だがここにきて新たな問題が発生したのだ。その問題とはっ・・・！！

「この暑さだよもう……。 」

「アリア、誰に話してるんだ……。 ？」

と俺と同じく暑さにとろけたヴィータが話しかけてくる。

「画面の向こうのみなさん……。 」

「……。 よくわかんないけどいいか……。 なあ、はやてえ……。 アイスもう一本食べちゃだめ？ 」

どうやらヴィータは緊急冷却装置を使いたいらしい。

だが返ってきたのは非情な答えだった。

「だめやでえ……さっき食べたばかりなんやからこれ以上食べたらお腹壊すよお？」

「うう……」

あ、更に溶けた。

「だけどこの暑さは異常ね……」

「だらしないぞ。シャマル……この程度で音を上げるな……」

おお……さすがシグナムさん。二つ名は伊達じゃないようです。

だけど……気のせいかな他の人よりも汗がすごいような……そして俺も凄い汗が……

何故に？ってこれは……汗が噴き出すね……えっ？どういふことか
って？

その……いつも通りシグナムは俺を抱っこしてるんです……／／／

暑いけど……だけど……安心するというか……だから離れたくない
というか……

——ご馳走様です。

と、とにかく俺のことは置いてっ／＼／

「……だがこの暑さはさすがに堪えるな……」

ザッフィー、代弁ありがとう。そうだよ。この暑さを何とかしないとなんだよ！

現在色々なことがあって国全体が電力不足になっている。

なのでこの灼熱地獄が生まれているのだ。

ならばいつそのこと別荘に行けばいいじゃないかという人もいるだろう。

しかし……それははやてによって却下された。理由は……

『逆浦島は嫌や』

だそうだ。

うん……別荘造るときの設定を間違えたかもしれないと今更ながら後悔している……

だがこうなるといよいよ我慢大会のようになってきた。

「よし……こうなったら……」

「「「「「こうなったら？」「「「「「

「海へ行こう！」

「「「「「ナイスアイディ……あ……？」「「「「「

そっだよ。最初っからこうすればよかったんだよ！わざわざ家の中で……

八神家の全員の脳内（ザッフィー含む）

・・・アリア海へ。

↓男物の水着着る

↓陶磁器の様な素肌の上半身、幼いながらも妖艶なアリアの雰囲気。
そして乳k（ry

↓周囲の旅行者とHENTAIの鼻が天元突破

↓HENTAI「ヘイ！ その子誘ってるんだよねお兄さんと遊ぼうハアハア」

↓アリア、素直でいい子。

↓「？ いいですよっ！ 何して遊びます？」

↓一緒に遊ぼうというHENTAIを疑うことなく共に閉鎖的な

海の岩場へ。

↓
鬱
ヘ
ンド

「
「
「
「
「
認めるものかあああああああああ！
「
「
「
「
「

うわーい速攻で全否定……

「ってなんで！？もしかして通信簿に書かれていた、

「プールで泳いでないこと」を心配されているの！？

確かにこの世界に来てから泳いだことはないけど……転生前はそれなりに泳げたよ？」

まったく。失礼な妹だ。カナヅチじゃないのに……。

「えっと……そうじゃなくって……／／／

（あかん！どうやって説明したらいいんや？

このままだと海鳴の浜が血染めに……そして兄ちゃんの貞操の危機が！？）「

「だめ……？（うるうる」

「ぐっ……！」

（た、耐えてはやてちゃん！）

（せ、せやかてこれは……あかん……反則やつ／＼／）

（くっ／＼／……待てよ……？　これだ！）

「アリア！」

「ふえ？なに？シグナム」

「この間、囑託の任務である無人世界へ行ったんだがその海はどうだ！」

なかなかきれいだったぞ！しかもさっき言ったとおり無人だからな！

プライベートビーチみたいなものだ！」

「それはつまり……！」

「そうだ……周りを気にせず泳ぎ放題だ！」

「行く！すぐ行く！水着用意してくるね！！」

（（（ナイスシグナム！）））

無人世界『ウィンデール』

sideさんになしよー！

「ふええ……」

「これは凄い……」

そこは正に天国に海が存在したらこうなるだろうという景色だった。

宝石のアクアマリンのように澄んだ水。真珠をちりばめたかのような白い砂浜。

色とりどりの熱帯魚とサンゴ……八神家はあまりの美しさに言葉が出なかった。

「気に入ったか？」

「うん……うんっ！本当にありがとう……シグナム」

「ふふ……アリアの笑顔が見れるのならこれくらい安いものだ」

「じゃあ、早速みんなで泳ごうぜ！」

「あ、ヴィータちゃん！ちゃんと準備運動しないとだめよ！」

着替えは家で済ませてあったのでヴィータは上着を脱ぎ海へとかけていった。

「じゃあ、俺も泳いでくるかな？」

「アリア！競争しようぜ！」

「オッケー！」

アリアは羽織っていたパーカーを脱ぎヴィータを追いかける。

「あんまり沖に行っちゃだめよー？」

sideアリア

「じゃあ、競争のゴールはあの赤い岩までね？」

「アリア！アリア！勝ったら勝った人のお願いを聞くんてのも追加な！？ヨードン！」

「あ、ヴィータ！ずるい！？」

そんな俺を尻目にヴィータは海に飛び込んだ。遅れて俺も飛び込む。そして全力全開で水をかき分ける。

「ぬおおおおっ！！」

「げ！？もう追いついて！？」

「負けるかあああっ！？」

抜きつ抜かれつの熾烈なデッドヒートが繰り広げられる！ゴールの岩まで後少し！

「ここだああああっ！！」

——バチーン！！

「ああああ！？負けたああ！！」

「はあはあ……ふふ……流石に久々なんで疲れたが何とか勝てた……」

「くそお……（せつかくアリアに色々してもらおうと思ったのに……）」

よっぽど勝ちたかったのかヴィータの目尻に涙が見てとれた。

「あつ……うん……ヴィータ、敢闘賞って事で後でアイス作るから」

「約束……だからな」

「うん」

さて早速岸の方へ……？あれ？何か周りが薄暗いような……

「あ、アリア……う、後ろ」

「うん？」

後ろに何かあるのか……

「……………!?!」

そこにはなにやらうねうねとしたものが……さっきタッチした岩から生えてました。

しかも何か吸盤みたいなものも見えます。

あ、岩につぶらな瞳が……

はい、もしかしくなくても岩だと思っていたのは巨大タコだったんですね。

わかります。そして俺は捕まっちゃいました。

触手がうねうねしてとても気持ち悪いです。

「……………ってそんなこと考えてる場合じゃないよ!?!?!離せこのタコ! H A N A S E」

といて離してくれるわけでもなしどんどん触手が締め上げて……?きませんでした。だけど……

「ちよっ!?!どこ触って?!ひゃんっ!」

い、いやらしい動きで変なところを触りはじめたんだっ……／／／

「タ……コ……？ 赤くて、ウネウネ……？」

転生前から、アリアはタコが嫌いである。

過去、家族と海へ行つた音色少年はタコツボを沢山拾ってきた天音ちゃんに、

「天音ちゃん、戻してきなさい。」

とちゃんとお兄ちゃんらしく注意した……が。

その時、音色少年から変なタコフェロモンでも嗅ぎ取ったのか、

タコツボの中から無数のタコが音色少年へ突撃したのだ。

考えてみよう。

赤くてうねうねしててぬるぬるで眼が虚ろな軟体生物が、

群れを成して体へまとわり付き、吸盤で吸い上げる。

当時まだ幼かった音色少年は重度のPTSDに。

そしてそれは、セイバー・・・アルトリア・ペンドラゴンの因子を持つ、

現在のアリアⅡ音色はそのタコへのトラウマが一層増大。

一度、調理中のタコをヴィータに無理矢理見せられた時は・・・。

「・・・タコ・・・？」

「お、おう！？（なんだか見せた途端態度が変わったので戸惑うヴィータ。）」

「・・・あ。」

「お、おい、大丈夫かつ！？」

「・・・あはは。大丈夫だよ？」

ズオオオオオオオオオツツ!!!!!!!!!!

「え？ あ、タコが廃につ！？ ちょアリア家が壊れるってアリア
あああああ！？」

Qこんなタコ嫌いが、異世界の巨大なタコと遭遇したら？

ドギヤアアアアアアアアアアアッッッッ!!!!

海が、割れた。

——近くにいたヴァイタごと、という事を追記しておく。

妄想爆発プロジェクト！ そうだ。海へ行こう。（後書き）

ほい！

こんな感じで書き上げていきます！

前半、中盤はS u - 3 7 Jさんが。

後半とオチは私が仕上げました！

一部編集を加えましたが。

さて、次は誰かな？

活動報告をご覧下さい。

募集の注意事項を掲載しています。

妄想爆発プロジェクト！ バッドエンド（前書き）

以下、大変ダークです。

ヤヴァイです。

おk？

批判とかは勘弁してほしいですw

こういう結末もあつたかもしれない・・・。

ってことで。

妄想爆発プロジェクト！ バッドエンド

分岐、
1

もし、スカリエッティがアリアをよくマークしていたら？

分岐
2

もし、アリアの能力が解析されていたら？

分岐・・・
3

もし、アリアの能力を封印できるものが出来たら？

side 鬱アリア。

「答えて・・・その女の子達・・・。」

・・・ああ。なんかお話してるみたいけどさ、フエイト、危ないよ？

「『ベギラゴンブレイド』」

手刀から放たれた摂氏6000度の炎の大剣がビルに向かって射出

される。

そのままテレポ。逃げるように一人を抱えて飛行してるもう一人の背に、

グラビ「ガ」を発動させる。面白いように地面に激突する両者。

重力の負荷をかけたまま、二人の下に降り立つ。

「へり・・・撃ち落そうとしてたよね。」

メガネじゃないほうの女の子が目を見開く。

「それがどうかなさいましたの!？」

「・・・とも思わないの・・・?」

「はい?」

「小さな女の子が乗ってたんだよ・・・? なんともし・・・思わないの?」

メガネの子はいまだに俺を睨み、

恐らくカノン砲を撃ったであろう女の子は顔を背けた。

「・・・殺すことに、躊躇いは無いの・・・?」

「ええ、ありませんわね!」

「・・・そう。じゃあ・・・。」

びゅおん!!

——ガキイイイン!!

「バレバレだよ、お姉さん。」

「っ!?!」

背後から迫ってきた「ちょっと早めな攻撃」をオートリフレクで防御する。

「・・・オートリフレク? まあいいや。」

振りぬいた姿勢の武人っぽい女の方は、また高速移動。

「ライドインパルス!!」

「あ、助けるんだ・・・。」

グラビガの負荷を逃れた二人を助けようとする。

「腕、どこだ。」

『IF・・・』

「とりあえず、こっちっす。」

「なにを・・・っ!？」

地面から出てきた手が俺の喉へ押し付けられる。

瞬間・・・違和感が訪れた。

全身に電流が走る。何故か息が荒くなり、体に力が入らない。

「なに・・・を・・・？」

「成功ですわね・・・地上の守護神様？」

メガネの・・・そう、クアットロがこちらに笑顔を向ける。

「あなた自身の魔力であなたの力を封印させていただきました♪」

「……………え？」

封・・・印・・・？

「まずは気絶してもらいますわね？ トーレ姉さま！」

「……………おう。」

「っ！？」

よくわからない。封印？ 力が？

「腕の礼だ。いい声で啼けよ？」

「嫌……………いやあっ！！！」

腕を斬り飛ばした女の人が近づいてくる。

でもそれ以上に……………。

あの武人のような人が、こちらに向ける視線が怖い。

じつとりと絡みつき、どこか嘲る様な視線、釣りあがる眉。

「……………あ……………」

シグナム・・・みたい・・・？

！！

ダメだ、考えが纏まらない。体が火照って、頬が赤くなって。

喉に衝撃を受けた時に生まれた違和感なんだ。そう。事実そうだろう。

「お前の苦しむ表情を見せてくれ。」

「・・・？」

俺には、うでをふりあげと　　しか　　記憶　　無
ず

覚えているのは。

あの後、よくわからない所に連れて行かれて裸にされて・・・

とにかく殴られて、叩かれて、蹴られて、

注射されて、沢山Hな事もされた。

いつもは鉄格子の部屋に入れられ、

着ている物は、汚れた白いワンピースに、首輪だけ。

喉には蝶のような文様が刻まれていた。

「まるで、囚人の烙印みたい・・・。」

自嘲を含んだその言葉。

「・・・本当に・・・ごめん・・・。」

その言葉に、答え、謝る声が。

「・・・セインちゃんが気にすること無いよ。」

「・・・でもっ！」

「俺がここに居るのは・・・捕虜みたいな感じだよ。」

捕虜なんだから、殴られて、蹴られて・・・

・・・レイプとか・・・されても、全然気にして無いよ？
だって当然だもん。」

「で、でも・・・こんな・・・こんな扱いって・・・！」

答える声の主・・・セインは震える声で言う。

そう。あの時、意表をつけて俺に烙印を押せたのは・・・。

間違いなく、セインだけだった。

そして、彼女はここまでひどい待遇を見るのは心が痛むのだろう。

いつも、俺が牢屋から出されて用を済まされた後、

必ずと言っていいほど・・・能力でここへ来てくれる。

今日は朝起きたら目の前にいた。

いや、朝っていうのももうわからないんだけど・・・ね。

ウーノはとにかく欲求不満のようで。

クアットロは俺を着せ替え人形にして、その後は情事へ。

トーレは・・・嗜虐趣味。うん。暴力を振るって性的快感を得る人。

スカリエッティは・・・とにかく俺のどこかを弄くる。

そんな事を考えていると、遠くから足音が聞こえてきた。

「セイン、逃げて。」

「ア、アリアは・・・」

「いいんだ。きっと、誰かが助けてくれる・・・。」

その声にハッとしたように顔を上げると、セインはそのまま地面へ潜った。

鉄格子のドアが開く。

・・・トーレだ。

「ふん、無様だな・・・らぁッ!！」

「グッ!ー!ううう・・・」

いきなり首元を掴まれ、くぐもった声を出す俺。

「どうだ、苦しいか?自分が斬り飛ばした腕で、

自分が締め上げられる気分はどうだ!? あぁ!ー!？」

こうしてる間にも、手は段々とその締め付けを強くする。

「い・・・いや・・・やめ・・・て・・・た・・・すけ、て・・・シ・・・グ、ナ・・・ム・・・」

俺の苦痛の声を聞いて上気していたトーレだったが、

俺がシグナムの名を口にした瞬間、トーレは烈火のごとくその表情を変えた。

「っぁ!ー!？・・・や・・・ぁ・・・い・・・き・・・ぁ・・・」

「うるさい……うるさいうるさい……！」

お前…は、お前は私達を、私を見ていればいいんだ……！！

他の者の事なんて考えるな……！！……ふん」

突然手を離すトーレ。

そして受身すら取る事が出来ず、俺は息も絶え絶えになりそのまま倒れてしまう。

「ゴヒュッゴヒュッ……ヒュー……ヒュー……」

「ふん、まあいい。時間はまだまだある。」

ここにお前の愛する者が助けに来るのが先か、

それともお前が壊れるのが先か、一体どちらだろうな……。

楽しみだ、とても楽しみだ……。」

薄い笑みを浮かべつつ、そう言って部屋から出て行くトーレ。

俺はそれを虚ろな視線で追いつつ、

心の中で助けを求めながらもシグナムや皆の事を思う。

（誰、か…助け…て…シグ…ナム…みんな…）

そうして俺は闇に落ちていった…。

スカリエッティのラボへフェイトと共に乗り込むシグナム。
ケンカ別れたままとなった最愛の夫はここにいる…。。

その情報を信じてここまでやってきて、スカリエッティ達を打ち倒すも。

「あの子は奥の独房にいるよ。」

その言葉を聴いた瞬間、彼女は走る。

ただ、奥の独房目掛けて。

唯一ドアの閉まっている独房を、その剣で斬り開ける。

その寝台の上には、首輪につながれた最愛の人……。。

「アリア！！ 助けに来たぞ！！」

——もう大丈夫だ。

その言葉を掛け様とした。

否、掛けなかった。

「ねえ……お姉ちゃん、誰？」

烈火の将は言葉を失った。

「私……だ……シグナムだ……ぞ……？」

「知らないよ？ ……トーレはどこ……？」

その少年の瞳は、もう輝きを灯していなかった。

「トーレが来ないよ？ あの人にボクは苛められないといけな
いに……。」

ねえ、お姉ちゃん、知ってる？」

少年は言葉を区切り、烈火の将に話す。

「トーレとかスカリエツティとかみんなにねー？

殴られて蹴られて斬られて注射されて、

陵辱されて優しくされて脳みそを弄くられると・・・」

体を抱き締めて言う。

「ぜえーんぶぜえーんぶ、忘れられるんだよっ！...？」

烈火の将から、剣が滑り落ちた。

「ボクは誰だったのかすら思い出せないんだ」

でもそれでいいんだと思うけどね。

だって、忘れるってことはどうでもいいって事だしねっ！」

そして、彼は、かつて最愛の人の心に止めを刺した。

「でもボク大丈夫だよ？

ボク、『寂しくなんかない』もっんっ！」

止めを、刺したのだ。

大粒の涙を・・・零しながら。

全てが遅かった。

少年はその両手を、虚空に伸ばす。

誰かに抱き締めて貰いたそうに。

だが・・・烈火の将は、その手を取り、抱き締めることなど適わなかった。

だが、烈火の将は希望を捨てなかった。

JS事件が終わった後も、少年の精神治療に付き合った。

少年が自らを殴ってほしい、

自分を傷つけてほしいと・・・

願い、狂い、暴れだしても、

ただ、烈火の将は彼を抱き締めた。

あの時、抱き締めていればという、想いと共に。

機動六課の面々も、彼女に全面的に協力した。

・・・だが。

彼は思い出すことを拒否した。

忘れるという事は・・・辛い記憶なのだろうと。

その磨り減る心を、傷つける記憶なのだろうと。

彼は思い出させようとする周囲の人々に、戸惑い、怒り・・・

憎悪した。

・・・時も経ち、想いも風化する。

「アリア、帰ったぞ？」

風化、いや、変化だ。

「最近のアリアはベッドから出たがらないからな。」

時が起こす変化は・・・彼の場合は。

「ほら、この後、高町たちとお出かけに行・・・」

そう。

「アリ・・・ア・・・？

な、なんで・・・天井からぶら下がってるんだ・・・？」

空虚感だった。

「そん・・・な・・・・・・アリア！アリア！！」

彼の精神はすでに限界だった。

徹底的に暴虐と陵辱の限りを尽くされて自己防衛のために記憶を失った後、

その失われた記憶の一旦とも言える人々と過剰に接触し続ける。

独房から解放された後も、彼の精神的ストレスは着々と溜まってきた。

新暦77年、9月19日。

アルトリア・ムーンライト・八神は、

天井の梁からシートで首を釣って自殺という形で『それ』を爆発させた。

私達機動六課の面々は、どこで選択を間違ったのだろう。

私達は……もう、悔やむことすらできない。

ン。

元機動六課所属、執務官、フェイト・T・ハラオウ

彼を、抱き締める人は・・・もう、いない。

妄想爆発プロジェクト！ バッドエンド（後書き）

トッキーさんが元ネタ提供してくれました！

トッキーさんが書いたのはトーレがアリアの首を掴みあげたところから、

放して捨て台詞言って、アリアが想いを思ふところまでですね。

どうでしたか？

ダークなお話でした。

深夜だから筆が進んだぜ・・・。

妄想爆発プロジェクト！ バッドエンドその後？

・・・。

sideノーヴェ

「っていう話を考えたんだけどどうかしら？」

そう言って目を輝かせながら感想を聞いてくる姉。

姉と言っても遺伝子的には全く繋がりはないが――

の姿に少し頭痛を覚えつつ私は投げやりに答える。

「クアットロ・・・感想とか以前に何故にあたしに見せたんだ？」

「えー？だってノーヴェちゃんなら・・・」

おもしろい反応があるかもって思ったからに決まってるじゃない？」

さも当然と胸を張る姉・・・クアットロの姿にあたしことノーヴェは深いため息をつく・・・

「あたしは姉さまがたが期待できるような感想は出せねえよ」

「うーん・・・残念」

「そりゃあ良かった。んじゃああたしは訓練に・・・」

行くからと言う言葉は次の爆弾発言で続ける事が出来なかった。

「じゃあ、かわりにチンクちゃんに感想を聞くとしましょう」

「!?!」

なん・・・だと・・・？チンク姉に・・・あの優しいチンク姉にアレを見せるだと？

あの、中盤から終盤前まではほぼ肌色のアレを・・・？

クアットロの書いたものは基本フルカラーです

「そんなの認めるかああああっ！！！！」

私はクアットロの試作品をひったくる。

「もう一度読み直してやる・・・だからチンク姉には見せんじゃねえぞ？」

「わあい、ありがとうノーヴェちゃああん♪」

（まあ、ホントはもう見せたんだけどね？こついつのはデータが多ければ多いほどイイわあ）

side 眼帯娘さん

「むう・・・私はもう少し小さいほうがいいな。」

この男の娘には息子がいたよな？ その子なんかドストライクだ。

「

変態だった。

数時間後

「ウーノ姉様は降板を希望。やっぱりドクター一筋なのかしらねえ？
さあーって……。」

『泣いているのか？……些か小さいが、私の体を貸そう。』

「キミへ届け。一途な想いは奇跡を起こす……チンクちゃんルー
ト！」

後は・・・

『あなたは私に色をくれた・・・だから次は、私が・・・』

墜天使、舞い降りる。六課との敵として対決・・・ルーお嬢様ルトー！

そして・・・一番気合を入れました・・・

『私が支える！　ずっと、ずっとずっと傍にいるから！

だから・・・死にたいなんて・・・言わないで・・・。』

愛の逃避行！！

力を封じられた無力な少年を助ける・・・セインちゃんルート！

やっぱり本命はセインちゃんよねえ♪

後はこれを元にペン入力で明日の夕方に入稿っと。

今年のコミケもまた稼ぎまくるわよっ！！」

ギョオオオオオオオオオオオオン！！！！

そんな感じで燃えている私の背後にとてつもない殺気がぶつけられた。

「この殺意の波動……は……」

「クアットロ……」

「は、はい……何かしらトーレ姉様？」

クローベルと模擬戦をしていたのではありませんのことゝ（汗）

まずい・

や、やっぱり勝手にトーレ姉様を出したのはマズかったかしら……

ああこの後は説教代わりの模擬戦ね……

シルバーカーテンもトイレ姉様には効かないし……ああ……

「いや、クローベルとは終わった……が、その……だな……」

んん？ 何やらトーレ姉様の様子が……？

珍しいですわね。トーレお姉さまがどもるなんて。

「なんですの？」

「私との普通の恋愛ルートはないのか？」

なん……ですって……？

トーレ姉様が・・・あの堅物なトーレ姉様が恋愛ルートをリクエスト！？

「あ、あのお・・・トーレ姉様？　つかぬことをお聞きますが・・・」

「なんだ？」

「あ、あの少年に対して怨みとかあつたんじゃ・・・？」

腕の件とか・・・

「なんだその事が・・・別に怨んではないぞ？」

あれは私の油断が生んだ結果だからな。

借りは次の戦いで返すさ・・・

そしてあわよくばそのままお持ち帰りして・・・ふふふふふ／／
／

「・・・ヨソウガイデス・・・」

どうやら今日もスカリエッティ一味は平和らしい・・・

「ふふふふ・・・やっぱりメガ姉様の作品はいいですねえ・・・」

え、こんなことまで？ うわぁ・・・／／／」

にしてもこの攻められている少年・・・

なんかアリア君に似ているような・・・まあ、きっと気のせいですよ
ね♪

「シャーリーさん、ちょっといいですか？」

「あ、はい」

続きはまた後で読もうっと！

妄想爆発プロジェクト！ バッドエンドその後？（後書き）

S u - 3 7 Jからの救済案！ W

リア共に見せたら、「おま・・・いろんな意味で才能あるよ?」

って言われました W

活動報告も更新！

妄想爆発プロジェクト！ IF リンディエンド。(前書き)

おまえら
w
w
w
w
w
w
w
w
w
w
w
w
w
w
w

わーにんぐ。

リンディ x アリアです w 皆様の強い希望に (ry

一応、ネタです。

過度な期待は勘弁ねっ！

注意点を説明しておきます。

- 1、旧約準拠
- 2、流星の魔法を使われず、アリアは戦って生き残った。
- 3、友人のリンディが天涯孤独のアリアを引き取った。
- 4、Asでは決戦後、すぐに消滅。
- 5、リンディ「が」アリアにフラグを立て気味（勿論その逆も。

6、リンディにショタコンの気が・・・。

7、おい、アリアが乙女になって（ry

8、いつも通りのギリギリの濡れ場・・・。

ok?

許容できない方はすぐにバックしましょうw

では、はじまりますw

妄想爆発プロジェクト！ IF リンディエンド。

新暦66年。

・・・夏。

どーも♪ アリア・M・ハラOWNですっ！

現在俺は学校に通いつつ、ハラOWNの家を守っています。

・・・と。言っても。

聖枢解放のフィードバックで、また魔法を使えるのは今年の12月。
今の俺はただの10歳の子供。

まあ、月の福音にフェイトとなのはの魔力を充電させてもらってるから、

自分の身は自分で守れるけどね♪

・・・消滅から帰ってこれたのは奇跡だ。

・・・でも、そんな中。

3ヶ月の長期航行から、リンディさんとクロ兄が帰ってくるのだ。

「~~~~~」

「ご機嫌だねえ」

「そりゃそうだよアルフ。二人が帰って来るんだもん！」

「フェイトはタイミングが悪いといつかなんと言つか・・・」

「昨日から泊まりの任務・・・南無三・・・」

「ご馳走が食べれないと分かった時のフェイトの顔は・・・。」

「母さん達にもしっかりと食べてもらわないとね」

「そうだね」

・
・
・。

・
・
・リンディさん
・
・かあ
・
・。

あの日。俺が犯人達の死体に囲まれてた時。

一番に来てくれたのがリンディさんで。

心が閉ざされて、感情が消えた時。

一番話しかけてくれたのがリンディさんで。

睡眠薬で自殺しようとした時。

一番に助けたいのはリンディさんで。

4月から半年経ち、「貴方はいったい何？」と聞いた時。

「あなたを大切に思ってる人よ」

そう言っ、俺に『色』と『心』をまたくれたのはリンディさんで。

恩返しは、できてるだろうか。

「できてるよ。アリア」

「・・・ふえ？」

・・・え？

「宇宙空間で闇の書がアルカンシエルで消えなくて、

アースラが落ちそうになった時に助けたのはどのどいつだい？」

・・・。

「いい啖呵だったねえ・・・」

まさか愛の告白をするなんて思わなかったけど・・・」

そう。去年の12月20日。

アルカンシエルで消滅しなかった闇の書の闇。

それはアースラを呑み込もうと肥大化し始めた。

誰もが啞然とする中。アリアだけが動いたのである。

アリアは単身で宇宙空間へ転移。

闇の書の闇から放たれたアルカンシエルのコピーを、

アヴァロン
全て遠き理想郷で防ぎはじめた。

その時、全員に聞こえる通信でリンディが呼びかけたのである。

「やめて!! アリア君が死んじゃうわ!!」

「艦長!! アリア君のバイタル急速低下!!」

『やめ・・・ない!!』

「いや!! いや!! クライドじゃなくアリア君まで・・・!!」

『うるさい!!』

「っ!?!」

『ここで諦めたら!!』

みんなが死んじゃう!!

みんなが不幸になっちゃう!!

ハッピーエンドじゃなくなっちゃう!!

死んだら後悔できないけど・・・!!

死んでもきつと後悔するから!!

でも死なない!! 絶対死なない!!

人形だった俺に、色と心を入れてくれたのはリンディさんだね
!!

すっかりした俺を見てコロコロ笑うリンディさんが見たい!!

砂糖と塩を間違えて涙目のリンディさんが見たい！！

凜々しい表情のリンディさんが見たい！！

・・・リンディさんが大好きだから！！」

「っ！！？／／／」

『だか・・・らああ！！！！』

S a c r e d C o f f i n - C U B E - F u l l D r i v
e . . . I . . . g . . .

...Error

『おおおおああああああああああああ！！！！！！！！！！』

S a c r e d C o f f i n

- Rule Breaker -

F u l l D r i v e I g n i t i o n

。エクスカリバーで擬似アルカンシエルを消し飛ばしたアリアは……

その闇に向かって刃を突き立てた。

『永久に続く魔の輝きよ霞め……。』

虹色の短剣が光り輝き……。

『ルールブレイカー破戒すべき全ての符……

俺の魔力も体も……。全部……。持ってけ……。!!』

・
・
・。

「あんたも未亡人に惚れちまうんざ・・・母さんも罪な」

ゴチイーン!!

「ほぎゃっ!?!」

・
・
・。

ガンッガンッ!! (音声のみお楽しみ下さい。

・
・
・。

ガスッガスッ!! (音声のみお(r y

・・・。

ドギヤツ!! バキイ!! ・・・チーン。(音)(ry

「~~~~~~~~ツツツ!!!!//////」

お、お風呂入ってこよう!!

sideリンディ

「・・・はあ」

・・・クロノは執務官の仕事で居残りだ。

そんな、一人で帰る地球の夜の道。

考えるのはアリア君の事。

私はあの可愛さにやられて・・・うん。

で、でも自分の息子よりも小さい子供を好きになっちゃうなんて・・・。

ちよ、そのあなた！！ 考えてみなさい！！

最近のあの子は妙にしつとりっていかゆったりしてて、

私の腕に抱きついて寝るなんて日常茶飯事なのよっ！？

・・・まあ、あの子がシルヴィアとタイラーの忘れ形見、

そっという責任が無いわけじゃない。

ただ、好き・・・そう。クライドと恋に落ちた時のような。

「・・・真性の変態ね・・・私は・・・」

何度か、アリア君に夜這いを仕掛けそうになったこともある。

・・・が、その度にアリア君が10歳という事を思い出して、自己嫌悪で死にそうになるのだ。

いかに聡明で大人のように頭が回るとはいえ・・・。

「・・・」

逆、光源氏・・・。

「だあああああああああああああああああ！・・・！」

何を考えてるのよ私は！！！！

———
ガンガンガンガン！！！！

電柱をひたすら叩きまくる。

「・・・ま、まずは家に帰りましょう」

きつと、アリア君が笑顔で迎えてくれる。

その純粹無垢な笑顔を見れば、こんな邪念も・・・。

「たーだーいま・・・？」

・・・？

電気はついてるけど静かだ。

リビングを見ると、アルフが目を回している。

「何があつたの・・・？」

・・・まさか・・・。

玄関に鍵は掛かってなかった。

そして殴られたのだろう、気絶しているアルフ。

「・・・嘘・・・？」

最悪の予想が頭を掠める。

「アリア君っ!？」

私は家の中を探し始めた。半分パニックだ。

いない。いない。いない・・・。

——
脱衣所とお風呂のドアを開ける。

私がもう少し冷静にいられたら。

「・・・え・・・?」

「・・・リ、リンディ・・・さん・・・?」

シャワーの音と・・・それが止む音、

そして風呂場から脱衣所のドアが空く音も聞こえただろう。

「・・・え？ あ、そ、その・・・っ！？／／／」

私の目の前には、

リボンを解き、

水に濡れて、

一糸纏わぬ、

アリア君が・・・。

「あ、そ、そのっ！」「ごめんなさっ／＼／」

そう言って風呂場の軽いドアを閉め・・・――

「アリア君……」

「ふえ？……ひゃっ！？ ん……ちゅ……！！？//」

s i d e アリア

今の俺の頭の中を占めているのは。

驚愕、戸惑い、そして……快樂。

リンディさんが俺の唇を蹂躪した後、

リンディさんはタオルで俺の体を拭きながら器用に愛撫を始める。

もう俺にはなにがなんだかわからなくて。

「あ・・・ん・・・ふう、ふあつ／／／」

一番上半身で敏感な胸を刺激され、

ずっと閉じて声を我慢していた口が開き、嬌声が漏れる。

「リ、リンディ……さ……や……やあ……んむうつ！」

また押し付けられ蹂躪される唇。

それは俺が残っていた最後の理性というか、そーいうのを抜き去り。

「私の部屋に行きましょう？」

「 は い 。

簡単に裸のまま抱えられ、

どこか焦点の合わない目でぽーっとしてしまっ俺。

抜け出そうにも、現役の魔導師と魔法の使えない10歳の華奢な男の子。

・道の途中アルフは気絶したままバインドで雁字搦めにされていた。

助けを呼ぼうにも念話は使えないし、

まださっきの余韻で声も虚ろにしか出せない。

リンディさんが指を振ると一気に部屋の扉が空いて布団が敷かれる。

マズイ。

そう思って降りようと手を動かすと・・・。

ポイ・・・っと布団へ投げ捨てられた。

そのまま布団へ寝そべったまま俺は力の抜けた手と脚を動かして、

局部と胸を隠し、垂れて涙目のままの目で睨む。

・・・だけど、そんな行為はリンディさんのよくわかんないスイッチを、

連射コントロールの最速スピード並みに連打する行為にしかならなかったようだ。

チェーンバンドが体に巻きつく。

両手は頭の上へ上げられ手首同士で縛られ、

足はM字型のような形に開くように固定される。

「アリア君・・・」

「・・・」

「・・・好き。大好きよ・・・？」

「・・・あ、俺・・・も・・・」

「・・・嬉しい・・・嬉しいわ・・・」

「・・・ふぁ・・・んにゃあああっっ！！？」

胸を甘噛みされ、電流のような刺激に背中が反る。

そのまま、夜は更けていつて。

s i d e クロノ・ハラオウン

・・・ああ、ビックリも何も・・・。

母さんがアリアに強制してるんなら、僕は全力で止めるつもりだったさ。

前々から、そんな変な色が目にチラチラ見えてたりしてたしね。

・・・けどね。不思議なことにアリアも・・・。

・・・ああ。依存と恋慕は違う。もう少し考えてみるとアリアに言
ったね。

でもちゃんとあの子のはのはの家に一ヶ月厄介になって、

気持ちを整理した後・・・宣言したんだ。リンディさんが好きです
と。

・・・止められないさ。止められる訳が無い。

・・・母さん？

高町桃子さんとなんだか川原で殴り合いのケンカしてきたらしい。

・・・本当にため息が出るよ。その日はその脚で・・・

・・・父さんの墓へ行ってきたらしい。

母さんの方で決着が付いたなら僕はもういい。

闇の書事件の時に父さんに対する決着はつけてる。

ま、その日から妙にオープンになったけど。

八神家となのはとユーノとフェイトは……。

「嘘だろおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

・ ・ ・ ああ。いい合唱だった。

後はフェイトの混乱っぷりがすごかった。

ふええっ！？
えっ！？
えっ！？

母さんの夫……？ わ、わたしの……？」

「お義父さんって事やな。」

『・・・なんだか倒錯的過ぎるの・・・』

・・・ん？ ああ。

繰り返すけど、母さんは変態だろう。

ド変態でド級のド犯罪者にドストライクで当てはまるんじゃないか？

ショタコンどころの問題じゃない。あれは異常だ。

・・・『初めて』は強引だったらしいけど・・・ね・・・。

僕は暴走しそうになったよ。下手したら犯罪だから。

・・・まあそれをひっくりくるめて大好きって純粹無垢に言えるのがアリアだし。

・・・ある意味一番幸せな夫婦になるかもしれない。

・・・ただ、ね。

こほん・・・／／／

部屋の防音をしつかりしてほしいな・・・。

僕もこんな年頃だからやめてほしい／／／

・・・生涯の伴侶・・・か・・・。

え、エイミィっ！？／／／

い、いや、そんな・・・笑うな！！ 綾時！！

sideアリア

「・・・い、いつてらっしやい・・・」

「行つて来るわ、アリア君」

「・・・ん」

「大丈夫、ちゃんと帰ってくるわ」

「・・・」

「じゃあ・・・んっ」

「ちゅ・・・」

軽く、唇に触れるようなキス。

「えと・・・えつと・・・」

「・・・？」

「・・・何言っか忘れちゃった・・・」

「・・・本当にアリアは可愛いわね。じゃ、いつてきますよ」

「いつてらっしゃいっ！」

エプロンを付けたまま玄関の外でお見送りする。

もちろん手を振るのも忘れない。

本当は協力者のいる転送ポートまで行きたいんだけど・・・ね。

短期間だけど・・・航行・・・だし・・・。

心配だなあ・・・。

「・・・もう誰もいないよ？」

「ひゃいっ!？」

振りっぱなしだった手を止め、後ろを振り向くとフェイトが。

「あ、フェイト・・・準備できたの？」

「うん。じゃあ・・・いつてきますの・・・」

スパーンッ！！

「ちゅーはしないよっ！？」

「・・・頭叩くことないんじゃない・・・？」

俺は「中学校を」中退。国のほうにも正式に認めさせている。

国家試験をあらかた100点総なめにしてあげたら国の人が泣いて謝って来た。

「じゃあ、行つて来ます。アリア」

「行つてらっしゃい。お弁当持った？」

「うん」

フェイトを見送り家へ戻る。

さーて・・・。

「クロノー・・・非番だからってゴロゴロしないのー」

「・・・うー・・・」

「・・・エイミ」起きる！ 起きるから！..!」・・・すごい速度・・・」

クロノが洗面台へ向かったのを確認して、ベランダへ出る。

「ハラオウン家は今日も平和です」

そんな・・・IF。

妄想爆発プロジェクト！ IF リンディエンド。（後書き）

おい・・・これシリーズ化できそうな（ry

妄想爆発プロジェクト！ A C F Aパロディ ♪（前書き）

私の重度のコジマ汚染者のリア友からのリクエストです。

アーマードコア、フォーアンサーの限定PVの内容を、

リリなのキャラに置き換えていますw

まずは元ネタを見たほうがいいかも。

【限定】ARMORED CORE for Answer プロ
モーションムービー完全版

→コピペしてググったりチューブで検索すると出てくるかも・・・。

・・・需要あるのかなこれ・・・

アリア「いや、やるしかないでしょw」

では、行きますww

A C F A わからない人にはマジでわけわからんと思います・・・。

この物語の舞台はミッドチルダです。

J S 事件が防げず、管理局ピンチ ↓

管理局解体戦争 ↓

結果、管理局は解体。『企業』が支配する世界へ ↓

10 年間・・・ ↓

このパロディ。

くキャストく

A C F A 主人公
首輪付き ↓ アリア

セレン・ヘイズ（オペレーター） ↓ シグナム

アンノウン（WG 搭乗者） ↓ 高町なのは

フィオナ・イエルネフェルト（WG オペ） ↓ 高町ヴィヴィオ

オツダルヴァ / マクシミリアン ↓ フェイト・T・ハラオウン

ウィン・D・ファンション↓ティアナ・ランスター

CUBE↓エリオ・モンディアル

有沢社長↓ザフィーラ

メイ・グリーンフィールド↓シャマル

ヴァオー↓ヴィータ

エイ・プール↓キャロ

オールドキング↓八神はやて

妄想爆発プロジェクト！ ACF Aパロディ ♪

管理局解体戦争から10年。

次元間での移動が困難になった未来・・・。

愚かな戦いを起こした人類と『企業』は、自らが破壊し尽された大地を見限り、

航空プラットフォーム『クレイドル』を建造。

高度7000mの空で、新しい清浄な生活空間を・・・見出していた・・・。

すでに人類の過半はクレイドルに住まい・・・

地上は資源基地と、それを巡る戦いの部隊に過ぎなかった。

一方で、管理局解体戦争において各企業による支配体制を確立した原動力、

魔導兵器『アーマード・コア・デバイス』と、

その搭乗者『魔導師』は、

その圧倒的な力の固体依存性に危機感を抱いた『企業』により、

企業機構『カラード』管下の傭兵として地上に残された・・・。

今では・・・企業群の主力は巨大兵器『アームズ・ガジェット』で
あり、

かつて戦場を支配した魔導師たちは、

薄汚れた地上で延々と繰り返される経済戦争の尖兵へと成り果てて
いた・・・。

side 白百合

「ミッションを説明しましょう。」

依頼主は『オーメル・サイエンス社』

目的は『B F F』の主力アームズ・ガジェット、

『スピリット・オブ・マザーウィル』の排除となります。

敵アームズ・ガジェットの主兵装は大口径の長距離質量兵器です。

図体ばかり大きな時代遅れの傭兵ではありますが・・・

その威力、射程距離はそれなり以上の脅威です。

・・・そのため、依頼主からはVOBの使用をご提案いただいています。

確かに、VOBの超スピードがあれば・・・

容易く敵の懐に入り込むことが出来るでしょう。

・・・説明は以上です。」

「オーメルサイエンス社はこのミッションに注目しています。
くれぐれも・・・よろしくお願いします。」

・・・。

人が一人入れるカタパルトの中で全身装甲フルスキンの装甲に包まれ、
背中に大型ブースターの重さを感じる。

「BFFのアームズ・ガジェット・・・

スピリット・オブ・マザーウィルを撃破する。

まずは、VOBで一気に彼我の距離を詰める。

超高速戦だ・・・愚問だと思うが、目を回すなよ？」

VOB点火。

「セイバーリリィ、VOB起動、操作制御確認。」

ウェイト
待機モードから巡航モードへ。
『

「証明して見せるアリア……お前の有用性を……！」

彼女の言葉を受け、飛び立つ……。

「ミッション開始だ……！」

シグナム「VOB、使用限界近いぞ……通常戦闘準備しておけ。」

シャーリー「予定進路上、敵アームズ・ガジェットを確認。」

シグナム「AP……40%減少……。」

グリフィス「企業のデバイス乗りだと……！！」

クソ・・・こんな時に限って・・・。」

ティアナ「言葉を飾ることに・・・意味は無い・・・。」

シャマル「なにこれ・・・ふざけてるの・・・っ!？」

シグナム「・・・このままでは諸共終わりだ・・・!」

シグナム「気をつけるアリア・・・耐久力だけはあるようだ・・・。」

撃破には時間が掛かるぞ、急げ・・・!」

sideなのは

フェイト「クローズプランを開始・・・。」

アリア君が教えてくれた・・・。

なのは「うああああああああああああああっ！！！！」

不屈の心は・・・

シグナム「デバイス、レイジングハートの撃破を・・・

いや、待て・・・再起動だと・・・？

ありえるのか、こんなデバイスが・・・。」

——この胸に・・・！！

sideヴィヴィオ

「あなたは・・・昔の私達と同じです・・・。」

過去、彼女達に・・・

——考えて・・・何のために戦うのか・・・——

何があつたのか・・・。

N o s i d e

シグナム「退避しろ！ アリア頼む・・・命令だ！！」

シャマル「相性がいいみたいね。アリア君とは♪」

ザフィーラ「削られた・・・すまないアリア、撤退する・・・。」

ヴィータ「悔いは無え・・・楽しかったぜ、はやて・・・。」

キャロ「あの・・・弾幕、薄く無かったですか？」

管理局跡地、クラナガン中央域。

ヴィヴィオ「こちら、レイジングハートオペレーターです。

あなた達は・・・クラナガンの主権領域を侵害しています。

速やかに退去してください・・・

さもなければ・・・実力で排除します・・・。」

フェイト「・・・高町・・・ヴィヴィオ・・・

管理局戦争の元凶が何を偉そうに・・・。」

なのは「・・・フェイトちゃん・・・。」

ヴィヴィオ「戦うしかないんだね・・・フェイトママ・・・。」

フェイト「その大げさな伝説も・・・今日で終わりだよ・・・いけるね、エリオ。」

エリオ「・・・始めましょうか。」

フェイト「さあ・・・見せて・・・管理局のエースの力を・・・！」

——レイジングハート・・・過去の遺物が・・・！——

ヴィヴィオ「さよなら・・・縛られた魔導師・・・。」

フェイト「あなた達・・・やはり・・・腐っては生きられないか・・・。」

T o N o b l e s . . .

心しておいて。 あなた達の情弱な発想が・・・

E a r t h . . . W e l c o m e t o t h e

人類を・・・壊死させるんだ・・・って・・・。」

No side

空に住む人々は・・・。

シグナム「人はゆりかごで空を飛び続ける・・・か・・・。」

おぼつかない足元に・・・。

はやて「所詮は大量殺人や・・・気にする要素がどこにあるん？」

気付き始める・・・。

シグナム「ふざけるなよ．．．この狂人があー!!」

この混沌に支配された世界は．．．。

ティアナ「アルテリアの主要施設を防衛します．．．。」

一体．．．。

フェイト「アルテリアの主要施設を襲撃するの．．．。」

どこへ向かうのか．．．。

ティアナ「お願いします．．．どうか．．．。

．．．。
」
人が死ぬなんて．．．私もう．．．これ以上見たくない．

フェイト「散っていったORCAの仲間達のために．．．。

．．．。
」
お願い．．．あの人達の死を、無駄にしないであげて．

その答えは．．．。

アリア「やってやる．．．散っていった仲間達のために！！」

シグナム「勝手に落ちるなよ？ 全てが無駄になる．．．。」

ティアナ「一つの命を想うっていうこと。

それを愚かと呼ぶんですか．．．？

だったら、死を実践して見せてください！！

・・・フェイト『隊長』のように……！」

『エクスカリバー……起動。』

Why do you fight？

『魔導戦記アーマードコア フォーアンサー』

『お求め易い価格で発売中！』

初回限定版にはオールキャストのサイン色紙（魔力印刷）と、

アルトリア・ムーンライト搭乗『セイバーリリイ』

高町なのは搭乗の『レイジングハート』装着版ねんどろいどが付いてくるっ
『』

テレビがなんか・・・PV流していた・・・。

「……………」

「…………アリア……………」

「うん。シグナム、どうする？」

「…………買う。」

「…………はあ。あ、P.O.3あつたっけ？」

「主のところから持って来よう。」

そういつて、トイレに行つて来る。…………とソファを離れるシグナム。

「何がしたいんですか……レジアスさん……。」

俺はそう言って……。

おもむろに攻略ウィキを作り始めるのだった。

妄想爆発プロジェクト！ ACF Aパロディ ♪（後書き）

批判は勘弁してください・・・。

それとごめんなさい・・・。

リア友よ、中々（？）の出来になったぞw

番外編1話 笑顔を見せて。(前書き)

これは、一週間前に私が実体験したことを元に書いています。

ヴィータとアルフォンスのお話。

もしかしたらハンカチを用意したほうがいいかも。

超長いですw

番外編1話 笑顔を見せて。

あらずじ。

アルフォンスが生まれてもうすぐ3年。

ヴィータはアルフォンスを可愛がってあげることが出来なかった。

だってアリアが好きだったから。

だってシグナムの子供だから。

だってあたしはこんなに醜いから

でもヴィータはヴィータなりに優しく厳しくしたつもりだった。

そんな事がアルフォンスを避けていい理由にはならないから。

・・・でも。

彼女は悶々とした日々を過ごしていた。

何故ならアルフォンスが一番苦手だったのはヴィータだったから。

アルフォンスにとってヴィータという存在は、

笑ってくれずにずっとむすっとしててお願いしてもご本を読んでくれないで、

全然頭を撫でてくれなくて・・・逆にすぐ怒って頭をぺしって叩く。

・・・そしてなにより、怖かった。

怖がるアルフォンスが、勇気を出して呼んだ時。

「・・・あ、う・・・う・・・ヴィータ・・・ヴィータおねーちゃん。」

ヴィータの事を始めて『ヴィータお姉ちゃん』と呼んだ時。

「・・・っ。」

「・・・あ、あう・・・。」

ヴィータは返事をしないでどこかへひっこんでしまった。

わずか三歳になるかという年のアルフォンス。

だけど彼は幸か不幸か聡い子であった。

「とーさん……くすん……とーさん。」

「どうし……な、ど、どうしたのアルフォンス!？」

大丈夫? どこか痛い? 体苦しいの?」

アリアがアルフォンスを抱きあげた時。

「ある、ヴィータ……えぐ……おねーちゃんに……くすんっ
・・

きらわれてるのかなあ……ぐす……ふえ……ふええええええ……
・
」

アリアは絶句した。こんなに涙を流してる理由に。

そしてアルフォンスも、ヴィータを避け始めた。

けど、ヴィータはアルフォンスを可愛がりたいのだ。

優しく頭を撫でて、ぎゅーって抱き締めてあげたいのだ。

そのまま膝に乗せて、耳元で好きだよって言ってあげたい。

ただ、アリアへの捨てきれない思いと・・・シグナムへの嫉妬が。

ヴィータは日に日に沈んでいって、家にも余り帰ってこなくなっていた。

かすかに八神家に不協和音が響き始めた時。とある出来事が起きる。

これは、アルフォンスとヴィータが。

騎士姫も知らない出来事で。

この世で一番の姉弟愛に結ばれるお話。

s i d e アリア

はぁ・・・とお皿を洗いながらため息をつく。

今思ってるのは、

『2 2 3 3 ! 2 2 3 4 ! 2 2 3 5 ! 2 2 3 6 ! 2 2 3 7 !』

庭でアイゼンを素振りしてる、今日はオフのヴィータと。

「・・・んゆ・・・はるまき・・・zzzz」

ソファですやすやお昼寝してる俺の息子、アルフォンスの事。

ヴィータが俺の事を好きなのは結婚式のちょっと前に言われた。

もちろん、聖祥学園組も一緒に。

そしてこの間の家族会議だ。

第27回八神家家族会議は大いに荒れた。

シグナムとヴィータがデバイスを抜こうとしたため教育的指導したけど。

・・・ヴィータの気持ちもわかる。

当事者だからこんな事を言うのはいけないかもだけど。

俺はヴィータの気持ちには応えられない訳で。

「難しい・・・。」

そうため息をまた吐くと。

p i p p i p p i p p i !

「通信・・・？ 珍しい。」

陸士１０９レーヴェ部隊長・・・

「部隊長っ！？」

「んう・・・」

「・・・！！・・・せーふ・・・。」

あわわ、アルフォンスが起きちゃう。

ヴィータが素振りしてる庭へ退避し、通信を開く。

ちなみにエプロンをつけて布巾を持ったままだ。

「すまない。アルトリアか？」

「部隊長、どうしたんですか？」

「・・・申し訳ないんだが、協力して欲しい。」

「・・・あー。厄介な事件ですか？」

「厄介どころか・・・かなりやばいやまだ。援軍が欲しい。」

「いや、いいんですが・・・。」

チラリとヴィータを見た。

「・・・・・・・・・・（そろそろきよろ）」

これからどういう状況になるのかわかっているのか、

無言できよろきよろそわそわと超動揺してる・・・。

『頼む。休養してるとはいえ・・・特別出勤手当も出る。

・・・一生の頼みだ・・・今度飯も奢る・・・ダメか？』

「ええ。わかりました。」

「？（ 0、； ）」

『ありがとう、すぐに来てくれ・・・あとエプロン似合ってるな。』

「どうも。」

プツンとモニタが切れる。

「……さて。」

「……あー、えっと……。」

「……ごめん。ヴィータ、アルフォンスの事頼めるか？」

「べ、別にいいけどよ……何すればいいんだよ……。」

えっと……今は15時……。

「アルフォンスが起きたら商店街へ買い物に行ってくれ。」

「え……。」

「今お昼寝したばかりだからアレだけど……

なるべくアルフォンスを一人にしたくないんだ。

ちっちゃい子って何するか分からないから。」

「……お、おう……。」

「ぐっすり寝てるんらしいんだけどさ。」

「そ、そうだな！ 早めに買い物済ませて……！」

「うん。でもアルフオンスって泣き虫だから。」

「・・・あ。」

「一緒に部屋に居てあげるだけでいいんだ。」

「でもあたしは・・・」

「いい機会だと思うよ？・・・ごめん、召喚獣はチャージ中なんだ。」

「あぐ・・・」

「ご飯までには絶対戻るから。」

「・・・。」

「・・・頼める？」

「・・・お、おう・・・。」

「・・・だ、大丈夫かなー・・・。」

「リストは冷蔵庫に張っておくね？」

「あ、ああ！任せとけ！」

「・・・ちなみなのはとフェイトもアリサもすずかも出勤と学校な。」

「・・・。」

sideギター

まずい。本当にマズイ。

V字になってるソファの丁度反対側に寝ているアルフォンスを見る。

・・・可愛い、けど。

「やめだ！ やめ！ 早く買い物に行っちゃおう。」

あたしは部屋で着替えてそのまま財布を掴んで玄関へ直行。

メモ取るのも忘れない。

・・・ドアを掴んだ、その時。

「ん・・・とーさん・・・？・・・とーさん？」

・・・思わず額に手をやった。いいじゃないかこのまま行っちゃえ。

ドアを引こうとしたけど。

「とーさん・・・？　ざっふいー・・・？　りーん・・・？」

・・・手が止まった。

「どー？・・・ぐすっ・・・どーお・・・？・・・どーお・・・？」

ぐすっ・・・ふえ・・・ふええ・・・ふええええええん！！

「！」

「ぐぬぬぬぬぬぬ・・・！！！！！！」

なんで足が動かないんだ・・・!!

——ガタアン・・・!

おい今のってソファから・・・

リビングへのドアを開いてアルフォンスの所へ走る。

「ふああああああああああああん!!!!」

やっぱり、床に転げ落ちていたようで。

「ば、バカ・・・カーペットでよかったぞ・・・。」

「ふえ・・・ぐすつ・・・おねーちゃん・・・?」

「・・・ったく・・・ほら。」

「・・・うあ・・・」

こいつの膝裏と首の脇に手を差し込み、お姫様抱っこのように抱き上げる。

アルフォンスは両手で何故か額を隠している。別に叩かねーよ。

「・・・。」

「・・・？」

「・・・。」

「????。」

「男、なんだからな・・・あんまり泣くんじゃねーぞ。」

「・・・うん」

そう言っつてソファにまた座らせる。

ティッシュで鼻水を拭いてあげて、糸目についてる涙も拭く。

意外と・・・早く泣き止むもんなんだな。

「とーさんは・・・？」

「その・・・なんだ、用事が出来た・・・ってよ。」

「・・・ん・・・（こくん）」

ちよこんと縦に頷くアルフォンス。あたしはアルフォンスに手を伸ばした。

・・・たまには、撫でてやるかと思って。

・・・アルフォンスは両手で額を隠して目を瞑った。

・・・あたしはそれに無性に腹が立った。

「おい、アルフォンス・・・。」

「・・・なあに・・・？」

「・・・買い物、その・・・一緒に行こうぜ？」

無論、あたし自身にだ。

箆笥からアルフォンスの服を出して着替えさせた後。

戸締りして家を出る。

「おねーちゃん。ある、どこ行くの？」

「あー。デパートだな・・・ちょっと遠いけど、平気か？」

「うん。だいじょーぶ。」

『この子体力だけはあるから疲れることはないと思うけど、

もし疲れたらちゃんとサインを送ってくれるから。』

アリアって本当に母親やってるよな・・・。

シグナムもちよつとは見習えつての・・・。

「お、おねーちゃん・・・。」

「んあ？」

「えと・・・その・・・。」

？　なんだ、あたし何かやらかしたか・・・？

「あ、あると・・・手・・・手・・・！」

「ああ・・・ほら。」

子供だからか、アルフォンスの手はとても暖かくて。

アルフォンスはぎゅーっとあたしの手を握り締めてきた。

そして、不安そうだった糸目をちよっと嬉しそうにする。

「ほら・・・行くぞ。」

「あ、うん・・・。」

あたしは何だか見ていられなくて目を逸らす。

自分がこの子の事をどう思ってるのかが分かってしまう気がする。

海鳴駅から電車に乗って二つ。

空雲市のデパートで買い物をする時には、

どこか慣れなくて、ぎくしゃくした空気になっちまったけど。

そして、お目当ての雑貨が無かったので食材だけになってしまった。

片手で少し重いくらいの袋を持って、海鳴の駅に降り立つ。

時刻は夜の6時。帰宅ラッシュなのか・・・。

「ひとおいね・・・。」

「ああ・・・ほら、改札出るから迷子になるなよ？」

「うん。」

電車から降りるとき、やはりもみくちゃにされる。

くっそ・・・あ、手が・・・！

ただ「繋いでただけ」の手が離れそうになる。

その手の暖かさがなくなる前にあたしは本当に無意識に・・・。

後ろへ戻り、左手でアルフォンスを包み込むようにして確保する。

そして一気に改札まで行き、

アルフォンスと自分の分を入れて速攻で通った。

「・・・大丈夫か？」

「う、うん・・・あるはへーき。」

やっぱりどこかおどおどした感じだ。

私は嘆息し、手を繋ぎなおしてまた進む。

二人で階段を下りる……

そして、今思えば……ここが多分、分岐点だったのかもしれない。

後ろから来た人の波の一部が、あたしに当たったのである。

地面から後数段、右肩に当たったせいで……

——ガシャン！！

階段から落ちてしまう。

左側にいたアルフォンスを巻き込んで。

「くっそ・・・アルフォンス・・・だいじょ・・・」

——ズキン！

「つつ・・・。」

膝を見ると・・・これまたいい感じに打ち付けてる。

買い物袋は無事みてえだな・・・。

「ん・・・。」

「大丈夫か・・・？」

「いたいけど・・・ある、なかないよ？　おとこだもん・・・。」

「そ、そつか・・・あははは・・・。」

あたしが一番痛えんだよ畜生・・・!!

「ヴィータおねーちゃん・・・だいじょーぶ？」

「・・・くっ・・・平気だっ!!」

「ひゃうっ!？」

・・・あ。

「わ、悪い・・・。」

「・・・ある・・・な、なかないもん・・・。」

帰宅して、八神家。六時半。

「シャルカアリアは・・・まだか・・・。」

『Are you ok?』

「アイゼン・・・ごめん。ちょっと黙っててくれ。」

『・・・』

打ち付けた膝が情けねえけど痛くなってきた。

無理矢理歩いてきたから更に痛みは増してる。

アルフォンスはテレビを静かに見ていて、あたしは今フリーだ。

「・・・っ！！（じわぁ・・・）」

ええい！ 泣くなあたし！！ あたしは鉄槌の騎士ヴィータ！！

こんな痛みで涙滲んでどうすんだ！！

・・・ま、まずは応急処置しねえと・・・。

「おねーちゃん・・・。」

「・・・？ ア、アルフォンス、どうした？

ほら、アニメが・・・！」

緑の球体・・・これって、マテリア・・・？

「あ・・・うう・・・」

「お、おい！ やめろ！ それは魔力が・・・！」

「や！ ぜったい、や！」

アルフォンスは、『本当に心配そうに』あたしに声を掛けて。

アルフォンスは、その顔になんとか困った顔してて。

アルフォンスは、それでいて緑色のマテリアを握って。

「いたいの・・・いたいの・・・」

マテリアから過剰ともいえる魔力が注ぎ込まれ、

閃光が溢れ出す。

『ケアルガ』

[illegible]

刹那、全身から疲労と痛みが取れて。

光が収まると同時に傷が全部癒える。

「お、お前……！」

「おねーちゃん、いたいところもうない？」

だいじょ……けほっけほっ……だいじょうぶ？」

わかる。この子が無理をしてると。

魔力をあんなに3歳が放出して無事で済むはずない。

この子は。

「ヴィータおねーちゃん？」

こんなにもあたしの事を思ってくれてるのに。

あたしは・・・！

「・・・ぐすつ・・・」

「ヴィータおねーちゃん!？」

我慢できずに涙がぼろぼろと溢れてくる。

「い、いたいところ、まだあるの?」

「違い・・・違いよ・・・。」

あたしはな、

「悲しくて・・・でも嬉しくて泣いてるんだ・・・!」

「おねーちゃん、いたいの? おねーちゃん・・・くすん・・・」

なかないでえ・・・なかないでよう・・・おねーちゃん・・・

ふえ・・・おねーちゃん・・・ふえええええ・・・」

「ごめん・・・ごめんな・・・？」

「ふえええええええええええええええんっっ！！！」

あたしはアルフォンスを抱き締めた。

2年と300日分くらいの思いを籠めて。

「ごめんな・・・ごめんな・・・ごめんな・・・っ！！！」

「びええええええっっ・・・！！！」

ぎゅっ。

ぎゅーーーーーっ。

あたしはアルフォンスを抱きしめた。

s i d e ア リ ア

・
・
・
。

すっ
ごい。

何が
すっご
いって
……。

「おねーちゃん♪ おねーちゃん♪」

「ひ、ひつつくな！ 暑いだろーが！」

「えへへー。やーだ！」

「……こんの！」

「やーだもんっ♪」

アルフォンスは可愛く首を傾げてにっこり笑う。

「・・・たく・・・。」

アルフォンスはヴィータの膝に膝枕をしてもらってて。

という状況だ。

わからねえ・・・非常にわからねえ・・・!!

「・・・けっ！　うちの（リンの）アルフォンスを・・・！」

「はいはいそのマスターと融合騎やさぐれない！」

キッチンでシャルと共に皿洗いをしつつ言う。

「でも不思議です・・・なんであんなに仲良くなったんでしょう・・・。」

「・・・さあ・・・あ、シグナム、次いる？」

「ん・・・ああ。貰おう。すまないなアリア。」

一人テーブルに座って酒盛りをするシグナムにお酒を出す。

「・・・良かった。そう思わないか、アリア。」

「俺もそう思うよ。シグナム。」

でも疑問が残る。本当に何でだろう。

「でもまだ・・・笑顔は見せてないんですね。ヴィータちゃん。」

「ああ。それは私も考えた。」

「打ち解けるのはまだまだ先・・・か・・・。」

・・・。

「「「・・・んー・・・。」」」

泡が手に付いたままのシャマルと、

布巾を持ったままの俺と、

顔がほんのり赤いシグナムが考える。

そして・・・。

「人とは。」

「・・・？　ざっふいー？」

「常に・・・変わるものだ。愛と憎しみは表裏一体。

・・・だが、あれはもっともいい変化の形だと俺は思っている。」

ざっふいー・・・いや、ザフィーラはくぁとあくびをして続ける。

「何があつたのかは俺たちにはわからない・・・

だがヴィータは間違いなく葛藤し・・・過ちに気付いて、

自らの間違いを認めて・・・変わり始めている途中だ。」

—— 笑顔を見せるのも・・・案外近いと思うぞ。

その言葉に、俺達3人は頷いた。

「・・・ざっふいー。」

「なんだ。」

「ジャーキー、おいしい？」

「……………ああ。」

side 三人称。

八神家リビング……………翌日、A m 8 : 1 5

今日は珍しく八神家の全員が休日だ。

だが、出かけないで団欒を過ごす予定。

そんなこんなでアリアが朝ご飯の食器を片付けていると、

アルフォンスがシグナムの方へちよこちよこと歩き・・・。

「かーさん、おさんぽにいきたいです。」

って言ってるのがアリアには聞こえた。

なんだか気になった八神家のおかんは、

ちよつとキッチンのカウンターから顔を出す。

「ん？ 散歩か？」

シグナムは新聞を置いて立ち上がろうとする。

・・・だがアリアと目があつた。

アリアはヴィータの方へチラッと視線を移す。

ヴィータはたまに日曜日の・・・

スーパーヒーローチャンネルを潰してやってるゴルフ中継に釘付けだ。

ニヤリとシグナムは笑うと、アルフォンスへ言った。

ちょっと大きめの声で。

「そうか・・・散歩に行きたいか。」

・・・ヴィータお姉ちゃんにお願いしてみたかどうか？」

「ん？・・・はあっ！？」

「ヴィータおねーちゃんに？」

「ああ。」

「・・・おこられないかな。」

「なにを怖がる。きっと平気だ。」

「・・・う、うん。わかった。」

アルフォンスはこそこそ話をしてるだったのか、

シグナムの顔から離れ・・・ヴィータへ近づいていく。

『ほら、ヴィータ。』

『ほらって・・・ど、どうすりゃ・・・！』

『頑張れヴィータ。』

『し、シグナムでめえー！』

『・・・努力だ。』

『ですうー！』

『ザフィーラにリンまで・・・。』

『大丈夫ですよ。ヴィータちゃん。』

『だ、大丈夫じゃ・・・!』

「ヴィータおねーちゃん!」

「な、なんだっ!」

「そ、その・・・あと、その・・・。」

『・・・はあ・・・ええか、ヴィータ。』

『は、はやて・・・。』

「あ、あと・・・おさんぽ、いつてほしいの・・・。」

『笑顔っちゅうのはな・・・自然に出るもんや』

ヴィータの表情は変わる。

ちょっと目を合わせた後。

少し目を伏せて、そして左下へ。

そしてまた、アルフォンスを見て・・・。

ちょっと困った顔で、

ふっ・・・と、笑った。

「・・・いいぜ、ほら！ 行くぞー！」

「あ、ヴィータおねえちゃ・・・んにゃあっ！」

ヴィータはアルフォンスと手を繋いで、玄関から出て行った。

素敵な・・・とっても素敵な。

・・・笑顔を見せて。

番外編1話 笑顔を見せて。（後書き）

どうでしたか？

恐らく私が書いた中で一番の文字数だと思います。

私には従妹の姉妹がいるのですが・・・

上が中学3年。下が幼稚園なんですよね。

下の子と二人で出かけたデパートから帰る途中。

私はラッシュに押されて転んでケガをしちゃって・・・。

従妹ちゃんはケロっとしてただけど、

私は膝を段差に酷く打っちゃってですね。

従妹ちゃんに心配されながら帰ったのですが、

無理矢理帰ったからすごい激痛。

痛くて。でも従妹の前だから痛いって言えなくて。

我慢してたら従妹ちゃんが、

ファンシーで可愛い絆創膏を私の手に渡してきて、

いたいのにいたいのとんでけーってやってくれたのですw

普段はすごいイタズラっ子なのに、

こんなことしてくれるのか・・・って思っ

て、
高校二年生なのに、

なんだか嬉しくてちょっとだけほろりと泣いちゃいましたw

ええ。ずっといい子いい子と頭を撫でてくれましたw

危うく　口　で始まって　ン　で終わる人になりかけた・・・ふう。

そんなこんなで、

アルとヴィータが何人にも断ち切られない、

強い絆で繋がった時の様子・・・でした。

まだ、この時のアルフォンスは、

僕じゃなくて一人称が『ある』なんですよw

番外編2話 機動六課、エクステンジ！ 前編。（前書き）

お昼寝してるとき、夢を見ました。

モニターに向かってチンク（男の娘）になった転生者が、

異世界へ行くっていうオリジナル小説を書いてる夢。

あほかww

でもランブルデトネーターって超使い勝手いいよねw

今度短編でも書いてみようw

そして性転換ネタです。

聖 転換しますよーー！！！！

六課の主力メンバーが、全員。

例外も居ますがw

番外編2話 機動六課、エクスチェンジ！ 前編。

s i d e シャマル

はあ・・・。

医務官に遺失物の目録点検させるってどんな事よ・・・。

私もヒマじゃ・・・ヒマね。

棚においてあるロストログィアの名前を見て名簿を記入。

「それでも暇な物は・・・あら？」

棚を見ていく中で一つ、目に惹かれるものがあった。

それはなんだかっこいい・・・櫟の木で作られた杖。

先端には青い球体が嵌っている。

・・・振ってみたい。

強烈な欲望が私の中から出てきた。

精神汚染。わかってるけど長い医務官生活で感はずっかりなまっ
いて。

私は杖を手にとって振るう。

瞬間、光が溢れて波動が六課の隊舎中に広がった。

私は何故か魔力を根こそぎ取られてしまい……。

・・・ブラックアウト……。

sideアリア

メガーヌさんに全て遠き理想郷を入れた翌日。
アヴァロン

俺はいつも通り午後の3時には仕事が終わっちゃって、
いつもの休憩室のベンチでのびーっとしていた。

「…………ん、にゃ…………えびちり…………zzz」

「んー。可愛いなー・・・」

膝にはアルフォンスが座っていてこっくりこっくりと舟をこいでいる。

俺は、くー。と寝息を立ててる俺よりチートな息子の頭を撫でた。

可愛いぞ我が息子よ。ヴィヴィオが病院に行つてて暇なんだな。

ヴィヴィオは今日から一泊の検査入院？とかいうやつだ。

クローンだからどうこうと言った内容らしい。

なのはは昼にはいたから問題は無いと思うけど。

「今日はエリキャロとヴァイスもいないんだよなー。」

ちよつと寒くなってきた10月の上旬。

アルフォンスをゆたんぽ代わりに抱き締めてお昼寝を決行。

した瞬間。

・・・それは一瞬の出来事だった。と未来の俺は語る。

波動が体を突き抜けた。

・・・と、思った瞬間、体に違和感。

「・・・はえ？」

何故か・・・そう、胸がすつごくムズムズするのだ。

素肌にYシャツを着てる俺だけど・・・ほ、ほら、

俺の・・・弱点、あ、いや・・・その、さくらんぼ、が／／／

下を見てみると・・・。

なんだか胸が膨らんです。

え、ちょ、男の象徴も感じられないんだけど・・・。

今だに船をこいでるアルフォンスの股をちょっと失礼・・・。

・・・ある・・・だと・・・？

え、俺だけ性転換ってこと？

「ん・・・むう・・・とーさん、お腹空いた。」

・・・？ とーさん？ なんでブラジャーつけてるの？」

「・・・女の子になっちゃった。」

「・・・父さんが母さんになった？・・・それは無いんじゃない？

・・・僕知ってるよ？ ぱっどって言うんだよね？」

なんでだろう。無性に腹が立った。

これも性転換の影響なんだろうか。

「いや、じゃあ確かめてもらんよ。」

「触っていいの？」

「ム力つくからOK。」

「・・・。」

——もみもみ。さわさわ。

ん、なんだか気持ちいい。

「・・・。」

「・・・？ アル、どうしたの？」

——もみもみもみもみ・・・！！！！

「へ、ちょ、ま・・・んっ・・・！」

「・・・！」

急にぴたりと手が止まる。

「・・・／／／」

「解せぬ。」

その後六課の主力メンバーが召集された。

アルフォンスを抱っこしようとしたけど何故か持ち上げられなくて

仕方ないから手を繋いでブリーフィングルームへ。

途中、交代部隊と非魔導師の人達が倒れていた。

・・・波動の影響だろうか。

放送をしてたはやての声もなんだか低いように感じて。

一抹の不安を感じながら歩く。

そして、ドアを開くと・・・。

茶髪ヘアピンのイケメンと、

サイドポニーのイケメンと、

緋色三つ編みのイケメンと、

ツインテールのイケメンと、

青髪ショート of イケメンと、

金髪でロングのイケメンと、

何故だか小型のイケメンと、

・・・そして、俺とアルフォンス。

「やっぱ兄ちゃんもTSしとったか。」

「・・・だ、誰・・・?」

「いややなー。はやてやでー」

・・・ああ。理解。

後ろで誰かがガチャンとブリーフィングルームに鍵をかけた。

「今なー、こんな状況やん。」

「・・・あ、ああ。」

「でな、随時記録されてる監視カメラとかも全停止したんよ。

カメラのレンズが全部砕けおつてな？」

いやな予感しかしない。

「で、どーせなら楽しく兄ちゃんを・・・しようと思ってな？」

「待つて！！ 状況が見えない！！ 断固意義を申し立てる！！」

「あかん。多数決や。」

イケメンなはやて？ はチラリとヴィータとティアナを見る。

・・・あの二人は反対してくれたのか。この《ピー！》パーティに。

「アルがおるんは想定外やけど・・・」

ヴィータとティアナ以外が尋常じゃない気合を放出する。

そう、これはピンク色の波動にして・・・煩惱・・・。

その時、ちらりと奥のテーブルに見えたものがあつた。

荒縄やローションを初めとして

《ピー！》、《見せられないよ！》、《自主規制》、

《おっとそれは言わない約束だ》・・・。

貞操。ピイイイイイイイイインチッ！！！！

瞬間、2人を除いた5人がにじり寄ってきて。

「「「「「ぐへへへへー、ちょっといい事しようZE」「」「」」」」

「ふ、ふざけないで！！ 集え、廃墟の虚光よ！」

手に魔力を・・・。

「え、ダメ・・・やっぱりごめんなさいアリア君!!」

「ごめん！ 謝るから兄ちゃん攻撃魔法はアカン!!」

「あ、アリアが私にお仕置き・・・はあはあ・・・。」

「調子乗りました勘弁してくださいアリアさん!!!!」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいですう!!」

「バカーーーーー!! 『ルインガ』!!」

「「「「「ひゃああああああああああっ!!」」」」」

——・・・シーン・・・。

・・・ふえ？ 発動しない・・・？

「・・・あ、あれ？」

「・・・なんでや？」

「・・・アリアの、」

「・・・魔法が、」

「・・・発動しないですう？」

「と、父さんどうしたのっ！？ 早くしないと・・・!!」

マズい。どうしたんだろう。てか魔力すら集まらない・・・。

「・・・ひょっとしてチャンスですう？」

・・・え

「「「「「アアリアちゃあああああああん!!!!」」」」」

「ひゃああああああああああああああっ!!!!!!」

何でルパンダイブなのおおおおお!!!!?

ごめんシグナム・・・俺は汚れちゃうみたい・・・くすん。

「夢く揺蕩う時の回廊よ・・・『クイックシルバー銀の走馬灯』!!!!」

・・・ガチン。

・・・ふえ？

見ると、アルフォンスとティアナとヴィータと俺以外の時間が停止していた。

・・・てか・・・。

「おまつ！？ 時間停止が聖枢の発動無しにつ！？」

「うんっ！　よゆーのアルフォンス君だよ！」

ってか……。

「はぁ……まずは説明しますアリアさん。」

「……ん。頼むよ。」

色々説明を受けた。

まず、召集された時にイケメンばかりで驚いた事。

波動が突き抜けて目覚めてるのは自分達だけの事。

で、はやてが悪乗りしてイグニッション！！

……しよつとした事。

そして・・・。

「今に至ると。」

タ、タチ悪い・・・！！WWW

「よーするにあいつらの性欲が暴走したってこつたな。」

「その、反対してくれたんだよね・・・？」

「つたりめえだろ！！ あたしには、その、レベルたけえし・・・。」

ま、まあヴィータは繊細だしな。

「私はそんな事しません！・・・アリアさんもいやでしょう？」

・・・まったく隊長とかスバルを誘惑するのも程ほどにしてください。」

「あ、いやその・・・ごめんね？」

「・・・まあ、アリアさんが魔性の男なのは知ってます。

・・・困ることもあるでしょうから、相談してください。」

・・・わーお優しい、涙が・・・。

「・・・あ、ありがとう・・・。」

「・・・。」

「ティアナ、顔赤けーぞ。」

「わ、私はっ!?!」

ティアナと俺が赤面した時。

「・・・その、もう限界・・・。」

「あ、アル、ごめんね、もうちょっと・・・。」

ティアナとヴィータはアルフォンスの護衛と原因の解明!」

「「わかった。」」

「と・・・父さんは・・・?」

・・・。

「貞操を守るために逃げる。」

「・・・? 皆は父さんとにゃんにゃんしたいだけじゃないの?」

「「「・・・。」」」

ああ・・・アルフォンス・・・。

今度しっかりと口止めしないと・・・。

「まー、開始しよう。アルフォンス、頼む!!」

「おめーはなんでか魔法が使えないみてーだから気をつけろよ?」

「貞操は守るぞ。」

「解除！」

[illegible]

やっぱ怖い！！！！！！

「待てええええええええええ！」

迫り来る純潔を失う恐怖！！

俺は純潔を守ったまま明日を迎えられるのか！

「エリオ君……どうなってるの……？」

「アリアさんの純潔を散らせるわけには……！」

そして任務先から帰ってくるエリオとキャロ！！

「・・・ヴァイス・・・助けて・・・！」

「気にいらねえ・・・狙い撃つ・・・！」

アリアを全力で助けるヴァイス・・・。

「守るぞ・・・ストームレイダー・・・！！！」

彼は彼女（？）のために再び銃を取る。

ヴァイスはアリアの純潔を・・・。

エロティックモンスター達から守れるのか。

そして・・・。

「・・・お前は・・・元に、戻っちまうんだな・・・。」

「・・・ヴァイス！」

「・・・来るな!!！」

「・・・っ!!！」

自分の想いに気付いてしまうヴァイス。

「・・・この想いは、墓場まで持って行かず。

こんな気持ちは・・・な・・・。」

・・・愛してる・・・アリア・・・。

そんな複雑でエキステンジしたラブストーリーの中。

「・・・ZZZ」

真のヒロインは、どこでなにしてるのでしょうか・・・？（汗

続く！

おまけ。

アリアの現在のスリーサイズ。

149cm / 40kg / B73・W53・H76

「アリア、なにやってるのさああああああああああああ！！！！」

番外編3話 機動六課、エクステンジ！ 中編。（前書き）

終盤、イケメンヴァイスです。

彼、めっちゃ格好良くなった・・・。

もうちょいシチュエーションが普通のピンチだったらw

色々修正。

番外編3話 機動六課、エクステンジ！ 中編。

「はあはあ・・・危ない・・・」

今は物置に潜んでいます。可愛い緑のモコモコと一緒に。

「くー？」

「ごめんねかーくん・・・」

「くー！」

魔力を必要としない魔石と月の福音のシステムを使えば、

魔石でも完全に召喚できた。

ただ、チヨコボの魔石を持ってなかったのは失敗だ。

沢山しまつてある筈とかモップとかチリトリの中から顔を出し、

様子を伺いながら今後のプランを練る。

「ヴァイスとエリキヤ口は外回り。シグナムとシャマルが行方不明。

交代部隊、非魔導師は全滅。高ランクが影響されてるのか？

「……むー。どう思っかーくん？」

「
＜
|
？
」

「あーもう可愛いなあ！」

もふもふもふもふもふもふ!!!

「うーん、うーん」

「よし、まずはあいづらが原因を発見するまで待機だ！」

今の俺は魔法が使えない非力な女の子だ。いや、元男だが。

今思うと体は・・・ほとんど胸が膨らんだ以外変わっていない。

男の象徴は絶対に復活する！ あ、あんまり立派じゃないけど・・・

「……胸も控えめです……なんだかこれも女体化の影響なのかつ……！」

パッドとか言われた時は猛烈に腹が立つたし、

アルフォンスが頬を染めたときはちょっと嬉しかった。

絶対に女性としての本能が出てきてる。

「・・・これはまずい」

「くー？」

・・・よし、一箇所に長い時間留まったら、

あのエロティックモンスターたちにすぐに索敵される。まずは移動を・・・。

ふわふわ

そう思い行動しようとした矢先、目の前にピンクの光の玉が。

・・・あれ、何このピンクの光・・・ああああ！！！！

「なのはのWワイド・Aエリア・Sサーチ・・・！！！！」

———
べしいー！

かーくんがシュートバレットを尻尾で弾き飛ばす。

「なんとおー!?」

なのは驚愕。

「かーくん！ 『シューティングスター』 ー！」

「くうーー！ー！」

多くの星がなのはへ直撃。煙を巻き起こす。

「かーくん、お願い！」

「くあー」

『クイックスタンプ』

「いたたた……（ガスッ！ー）……………」

・・・うん。確かにスタンプを命令した。

だけど・・・股間へ・・・だと・・・？

「こ、これが男の子の痛み・・・。」

「自業自得！」

そう言って走り出す。

「ま、まで・・・おおお・・・。」

「ベーーーーっだ!!！」

「くうーくうー」

六課隊舎食堂。

ここには誰も・・・。

「いない、か・・・」

「くぁーっ」

「ふう・・・ちょっと、休憩しよう」

だが油断はできない。何故ならなのはももつすぐリカバリーするだろっし、

「そこですう！ 『フリーズバインド』！！」

「なにっ！？」

「くう！？」

俺とカーバンクルの両手足が拘束される。

まずいますまずいますい・・・！！

「かーくんっ！」

「『プリズムバインド』！」

「くぁー・・・！」

かーくんは円柱の氷の柱に閉じ込められる。

「は、はやて・・・リン・・・！」

「うへへ、捕まえたですう」

「ぐへへ、捕まえたでえ・・・。」

高速思考！ 脱出は・・・。

不可能。

「iiiiiiiiいやあああああああああ！！！！！！」

「そんなに叫んだって誰もこないですう！」

「誰か！！ 誰か！！」

はやての背後を取ったのは槍を持った少年・・・。

「エリオ!!」

「早いっ!？」

「『ピアッシングランス』!!」

神速の高速突きで攻め立てた。

・・・股間を。

「ぎゃにゃあああああああああああああああ!!!!」

「あなたの股間が! つぶれるまで!! 攻撃を!! やめない!

「！」

「ちよっ！？ エリオっ！？ はやてのHPはとっくに0だよー！」

「アリアっ！！」

「ヴァイス・・・？」

エリオとキャロは原因の解明に走りに行くのと入れ替わりに、
ヴァイスが穴の空いた食堂に入ってくる。

「・・・お・・・おお・・・」

「ヴァイスッ！！」

俺は思わずヴァイスへ抱きついた。

「さっきの集束砲、ヴァイスだよねっ!!」

「・・・／／／」

「やったっ！ やったっ！ ヴァイス大好きっ！」

「・・・ぐほああっっ!!」

「・・・ヴァイス!？」

きよ、急に吐血したとっ!？ ごめんキモかったかっ!？

抱きついたまま見上げる。いやすいません。男にやられてもって感じだよ。

「・・・ちょ、ちよつと離れる・・・」

「?」

「・・・その、胸が、あたって・・・」

「・・・／／／」

「お前・・・綺麗だな」

「へにやつ!？／／／」

ヴァイスはポリポリと頬を掻きながら言う。

「・・・まー、気をつける・・・ってか、事情を説明してくれ」

sideヴァイス

エリオとキャラはこんな大人の戦いに巻き込まないので宿舎で待機させた。

いくらなんでもあいつらと戦うのはいろんな意味でレベルが高いだろう。

そして事情を聞いたんだけど・・・。

あー、こりゃあダメだ。うん、事情は聞いたけど・・・なあ・・・。

．．．．．正直、戻したくない。

「？　ヴァイス？」

「おう、とりあえず．．．ヘリポートに行こう」

「うんっ！　ヴァイスがいれば１００人分だよっ」

．．．おおう。

「．．．はやて達が起きる前に離れよう」

「ああ、そうだな」

美人の笑顔が最優先．．．調子いいなあ。俺。

こんな気持ちは墓場まで持ってくつてね．．．。

なんせ・・・初めて会ったときに一目惚れだもんなあ。

・・・まあ、そんなときや・・・すでに姉さんの婿さんだったけど。

しかも男って知った時はトイレで泣いた。これはガチだ。

魔性の女・・・ああ、女だぜ。ホント。

そう思いつつ俺は後ろから迫るナカジマの鳩尾を銃床で一撃。

牽制したはいいものの、すでに相手の間合いに入られている。

「ウオオオツ!!!」

『リボルバーキャノン』

「・・・っ!? シールド!!!」

緑の壁と拳が拮抗。ギチギチと音を立ててバリアが軋む。

俺はありったけの魔力を注ぎ込んだ。持てる全力の魔力を。

ああ、でも勝てない。

水色と緑の魔力光の眩しさに俺は目を細めた。

・・・どうして無理をする？ こいつは男だろ？

ああ、今は女だったけど、こいつらは悪気無いだろ？

遊び、そう、遊びだ。だったらこんな、

リンカーコアから魔力が全部持ってかれるような、

死ぬほど痛え思いなんかなくてもいいんじゃないか？

俺が手を離す。そしたら拳が振りぬかれ俺は確実に気絶する。

こっちの方が楽だ。全然楽。

俺は静かにバリアへの魔力供給を絶とうと目を若干広げる。

「・・・ヴァイス・・・っ・・・怖いよ・・・!!」

俺の目は、見開かれた。腰にしがみついた感覚を想う。

俺が負けたらどうなる？ 見ろ、現実から逃げるな。

アリアは間違いなくスバルに純白を散らされるだろう。

その遊びじゃない証はスバルの野獣の如き目が証拠だ。

じゃあ何か？ いつもの軽いノリで事件解決した後、

皆でハッピーエンドで笑うのか？ 一人、不幸になるのに？

「許せるわけねえだろ」

side 三人称

今もスバルの拳と拮抗するバリアの音がともうるさいのに、

それは凜と、静かに、聞いた者全てに音を忘れさせた。

ヴァイスの息に籠るのは火山の如き憤怒にして怒気。

妹を誤射した？ 所詮ヘリパイロット？ エース達に勝てない？

今の彼にはそんなものはそもそも関係ない

ただ守る。理屈ではない。男の、いや、『真の漢』の本能なのだ。

一目惚れ、初トキメキの相手が男と思ったときは神はこの世にいないと思った。

しかし・・・そう・・・『今は』・・・。

今は、あの可愛くも強いあの男の娘がか弱いただの少女になってしまい、

拳句の果てに彼らは暴走、理性を失いこの子の純白を散らそうとしている。

ああ、わかってる。彼はわかっているのだ。なんせ彼はすでに既婚者。

家庭があり子供がいて忙しくも充実しているこの子の生涯・・・。

しかしこの子の愛する人は未だに現れない。救おうとしていない。

ヴァイスは宿舎の寝室で徹夜明けで仮眠を取っている姐と慕う者に、初めて心の中で罵声を浴びせた。この唾棄すべき状況に何をしてるのだと。

しかし、そろそろヴィータとティアナが原因を突き止めるだろう。

こんな事ができるのはロストロギア・・・大体の見当は付く。

即ち、この事件もすぐに集束し、数多ある日常に埋もれる事となる。

笑い半分でこの話は未来に語られ、この子はどんな思いをするのだろう。

・・・それを、この子が悲しむ可能性を彼は見逃せるのか？

否。断じて否である。

この子が悲しむ顔を見たく・・・ああ、この子は貞操を失って傷を負い、

未来でそれが『笑い話』で語られるだろう。そうだ。語られるはずだ。

でも、この子はそれでも場の雰囲気を保とうと無理をして笑うだろう。

だから、彼は思った。

「（・・・なあ、クソツタレの神様よ・・・）」

この短い時間だけ。

「（・・・こんなすぐに解決する短い時間でいいからよお）」

ああそつだ。所詮他力本願。俺はそういう最低の男。

妹を見れば自己嫌悪し、パイロットに逃げ、知った顔でフォワードに忠告する。

史上最悪、最低下劣、なにかもから逃げてばかりの臆病者。

神に願うしかない。彼の限界はもう見えてしまってるのだから。

・・・ただ、神様はこの幻想^{夢想}を叶えてくれる気がした。

『Are you Ready?』

頼むから、凡人の俺に

U
l
l

D
r
i
v
e

I
g
n
i
t
i
o
n

S
a
c
r
e
d

C
o
f
f
i
n

-
C
U
B
E
-
F

この子を守り、
救ってあげられる魔法の力をください

番外編3話 機動六課、エクステンジ！ 後編。（前書き）

ラストR - 17です。ニガテな人は、

シグナムとの会話になったら所でブラウザバックしましょう。

合言葉はヴァイスイケメン。

許せるわけねえだろ。

その言葉と共にバリアは砕け、何故か世界から音が消えた。

バリアが砕けた結果ヴァイスは横殴りになって20m横の壁へ激突する。

屋外の開けたこの場所でヴァイスが吹き飛ばされたときに激突するものは、

自然と特殊コーティングされ新築となった施設の壁……。

腰にしがみついた俺も共に吹き飛ばされたが、力強い何かに抱き締められていた。

「ヴァイスっ！！」

ヴァイスは頭部から出血し意識を失っていた。

まずい。これは命の危険があるかもしれない。

「アリアさあーん・・・うへへへ・・・」

返事はない。当然だ。彼は意識を失っているのだから。

俺はすぐに行動する。ヴァイスが怪我をする前に己が犠牲になろうと。

ヴァイスの腰にしがみついていた手を離し、両手を広げ立ちふさが
る。

スバルとの距離は10m。少し後ろにヴァイス。

「・・・もう、酷い事しないで」

「はあいもちろんですよ？・・・あ、り、あさーん」

スバルは一気に俺との距離を詰め・・・っ！！

「イタダキマアアアアアッス!!!!」

俺は両の目を瞑った。

しかし、スバルは走るのをやめた。何故？

そう思つて目を開けると・・・。

「ヴァイ・・・ス・・・？」

そこには緑のツナギを着た黒髪の男。その背中が俺の前にあつた。

スバルは彼の姿を確認すると、拳を叩きつけようとする。

いけない。ヴァイスにはもう魔力を感じられない・・・だけど。

「何っ!？」

「・・・」

轟音。

その音と共に、スバルの右の拳がヴァイスの左手で掴まれる。

ナックルスピナーを装備した魔力の鉄拳を素手で受け止めたのだ。

「ヴァイス・・・？」

「放せっ!！」

スバルはバックステップで後退する。その時、ヴァイスがこちらを振り向いた。

その目はしかと俺を射抜き・・・俺の心臓が高鳴る。

段々とヴァイスの顔が近づいてきて・・・。

「この子を守り、救ってあげられる魔法の力をください」

唇同士が触れた刹那、ヴァイスから何かが立ち上った。

それは青。ヴァイスの緑ではない。俺の魔力光。

ヴァイスの瞳は青く染まり、体がオーラを纏う。

信じられない。脳が処理を拒否している感覚がする。

ヴァイスはゆっくりと俺を引き離し、スバルのほうへ向く。

そして足元に譜面を模したイヴァリース式のテンプレート。

同時に俺にはリフレクが張られた。そう・・・リフレク。

ヴァイスは静かに呟いた。

<http://www.youtube.com/watch?v=litO9ClVlAY&feature=relat>

ed

- B G M
Battle - v e r . -
Burn
My
Dread
- Last

sideアルフォンス

一箇所に複数の魔力反応が向かっているのが分かる。

恐らくなのはさん達が全員一箇所に集まろうとしてるのだろう。

「——っっ!!?」

なに、この力・・・僕が押しつぶされるほどの・・・っっ!!?」

光とは、とても曖昧だ。

しかし彼はその曖昧なモノを確固たる礎とした。

完全なるイレギュラー、起こり得るはずのない奇跡。

臆病者が、光の姫君を救う騎士になるための力。

『ヴァイス・グランセニツク

テキゴウリツ 50・・・60・・・ナオゾウカチュウ

マリヨク ソウリヨウ ブンセキ・・・EX

マリヨク キョウキュウ アンテイ

シンタイ ニイジヨウ ナシ

テキゴウリツ ジョウシヨウ テイシ ケツカ 300%

・・・

聖枢保有者防護保持機能に基づき、

ヴァイス・グランセニックを臨時適合者と認証。

ようこそヴァイス・グランセニック。

あなたの能力は『守護騎士 Level 5』となります。

敵対魔力分子確認・・・共に勝利を――『

「聖枢解放」

『Sacred Coffin - CUBE - Full Dr

ヴァイスの右手から溢れる光がヴァイスの体を覆い、

純白のフルプレートフルプレートの鎧が彼の体を包んでいく。

ヤワな魔導師は頭がおかしくなるほどの魔力総量。

白の鎧には金色の意匠が凝らされ、藍色のマントが背中背中で翻った。

形容するなら白騎士。この騎士の事がアリアには分かる。

この騎士はアリアを守るために現れた存在、守護騎士。

左手には円形のラウンドシールド、

右手に約束エクスカリバーされた勝利の剣。

上空には何時の間にか六課主力陣が揃い踏みしていた。

全員が畏怖しながらも杖を向ける。

「——っっ!!!?」

『デイベインバスター』

『サンダーレイジ』

『ミストルティン』

3種の砲撃が・・・尚、抱き締めあったままのアリア達へ届く前に、
白騎士・・・ヴァイスはゆつくりとアリアから離れ・・・振り向く。
兜の中の表情は見えない。だが、騎士の纏う全ての気力が怒りへと
変わる。

「『リラブランシェ』」

盾から光の波動が走り姫を守らんとその輝きは二人を包み込む。

桃色の光線は掻き消え、電撃は消失し、石化の枝は碎ける。

至近距離でオーラを浴び戦意消失したスバルを通り過ぎ、

騎士はリラブランシュに姫の守りを任せ前に歩み出る。

「アクセルシューター！！！！」

「ハーケンセイバー！！」

「ブラッディダガー!!」

彼女・・・いや、魔導師としておこつ。彼女らは焦っていた。

遠慮の無い攻撃が無傷なのだ。いや・・・それじゃない。

そう。姫が使う聖枢解放と同じ文字の「声」を聞いてしまった。

即ち、彼はオリジナルと同じ力を持つと。

ただ魔法を放ち、放ち、放ち、放つ。

しかし――

「温い」

――歩いてくる

それは栄光の凱旋にして進軍。

いや・・・魔導師たちにとって死神の足音と同義。

「『エクスカリバー』」

彼の右手の聖剣が光り輝く・・・いや、極光を発する。

同時に大気が揺れ、大地に罅が入り、海は高く波打つ。

放出されるはずの膨大な魔力は聖剣に『押し固められ』、

刀身はもはや極光で直視など出来なくなっている。

騎士の正面、魔導師たちの背後には広大な海。

・・・騎士は、静かに光の剣を振り上げた。

どんな魔法を受けようと、愛するものを守るため。

理屈ではない、ただ守りたかったから――

是、神話の再現。

「『アルカナムプレイヤー』」

ヴァイスは瓦礫の中から出てくる黄色の光弾を防いだ。

「・・・驚いたっすね。フェイトさん・・・」

防御の上から抜かれたなのはやてとは違い、

回避力に物を言わせた強引な戦術を行ったフェイト。

当たればどうという事は無い。今、この瞬間ではそれは正解だった。

「・・・」

フェイトは後ろを振り向き愕然とした。そう、後方の海が。

「・・・割れてる・・・」

そう。割れているのだ・・・モーゼのように。

「フェイトさん・・・貴方は何がしたいんですか？」

「・・・っ!」

何故私は立ち上がるのか・・・そう、フェイトは自問自答する。

今のヴァイスは言わばアリア姫を守る最強の騎士。

青の魔力光という事を推測すれば大体分かる・・・。

（聖枢・・・ヴァイスにはきつと、齒が立たない・・・）

聖枢の事はよくわからない。

今起こった事もわからない。

これからどうするかも・・・

何をする、何をしたい？

（私は・・・！！）

「私は！！　アリアとにやんにやんしたい！！！」

「・・・そうっすか・・・じゃあ・・・俺は・・・」

ヴァイスは後ろを見た。白銀の結界に包まれて気絶している彼女を。

彼は聖剣を構え、フェイトは細身の剣、ライオットザンバーを構える。

「おおおおおおおおおッ！！！」

「あああああああああッ！！！」

ソニックムーブの黄色い残光がジグザグに散る。

ヴァイスはラウンドシールドで初撃を防ぎ、魔力衝撃でフェイトを吹き飛ばす。

フェイトは空中で体性を整え・・・

「フォトンランサー・・・——」

六つの輝くスフィアが瞬時に配置。標的は・・・

「ファイア！！！！」

「『防げ！！』」

周囲にある瓦礫を一掃。破片が飛び散り土煙が起こる。

フェイトは察していた。先程のヴァイスの『侵攻』の秘密。

あれは・・・そう。ただの魔力暴走ではないのかを。

無意識下での行使ならば二撃目のザンバーを防いだ道理が通る。

「痛え・・・っすね」

（・・・ヴァイスは聖枢の力に振り回されている・・・!!）

「おおおおおおおお!!」

土煙の中から純白が飛び出した。

アリアが両手を用いて扱う聖剣をヴァイスはラウンドシールドと同
時運用。

対するフェイトはライオットザンバーをステインガーモードへ移行。

二刀流、袈裟懸けから始まる一撃はもはや目では追いきれない。

しかしヴァイスは一閃、二閃と続く閃光の連撃を上手くいなし、
刺突、右薙ぎ払い、袈裟掛けと聖剣を振るう。

その途轍もなく重い一撃一撃でフェイトを追い詰めていく。

「・・・っ！ バリアジャケットが・・・軋む・・・っ」

圧倒的魔力圧。フェイトは離脱を図り天空へ舞い上がった。

『Cartridge Load』

「集え雷光、汝はただ裁く者也・・・！！！！」

——カシユンカシユンカシユンカシユン

フェイトの福音詠唱。ミッド式のテンプレートが空中に広がる。

カートリッジ4発。同時に黄金色の魔力と紫電が大気に混じり始めた。

「ヴァイス・・・お前を倒して・・・！！！！」

『Trident Smasher』

「アリアと・・・にゃんにゃんするんだあああああああ！！」

トライデントスマッシャー！

左手から放たれた直射砲撃は、迷い無くヴァイスへ突き刺さり・・・。

「ファイアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

起爆。

もはや沿岸部は跡形も無く吹き飛び、無事なのはアリアのいる境界内のみ。

「・・・やった・・・か・・・？」

彼女・・・いや今は彼だが・・・の誇る集中型の砲撃。

彼女は空中で滞空したまま思考を巡らせた。魔力探知などあてにならない。

（クロスレンジに入れない、勝てないのならこれしかない）

彼女のこの全開の砲撃。以前アリアを十分に怯ませた物。

フェイトはカートリッジをリロードし次の詠唱に入る。

（・・・嘘）

「・・・フェイトさん達がアリアを好きなのはわかります」

「姐さんと結婚しちゃって・・・子供までできちゃって」

「・・・そうですよ。俺の初恋はアリアで・・・40秒で終わった」

「確かに年季が違いすぎるかもしれませんが・・・」

「でもよぉー……こんなのよぉおっつー!!!!」

「間違ってんだろ!!!!」

「抑圧された精神が弾け飛んだ結果なのは『そう』なのはわかってる!!!!」

「でも……手箆めにして……お前達は嬉しいのかよ!!!!」

「将来までコイツは・・・姐さんに対する罪悪感背負って生きてくんだぞ!!」

「いい加減・・・」

『リミッター解放』

「目え・・・」

『聖枢発動』

「覚ませやああああああああああああッッッ！！！！」

『技能行使』

天空へ跳躍。フェイトを楯で下に弾き飛ばし地面へ下ろす。

そして・・・楯は消滅。聖剣を真横に構えた後、正眼へ。

突進・・・斬り下ろす!!

「おおおおあああああああああああああ!!!!!!」

「何を・・・ぐうつ!!!?」

一撃

二撃

三撃

「招来超極!!」

四擊

五擊

六擊

「武神投影!!」

七擊

八擊

九撃

「霸王千年!!」

十撃

十一撃

十二撃

「遍く照らす極光の光刃をここに」

十三撃

「『超究武神霸斬』……！」

十三の斬撃がフェイトの体を切り裂いた。

「俺の女に・・・手え出すな」

s i d e
アリア

それを最後にフェイトは瞼を閉じた。

光、音・・・沈黙、そして声が聞こえた。

ゆったりとしてて、誰かにお姫様抱っこされてる感覚。

手を動かすと、ひんやりと・・・でも暖かい感触。

うつすらと目を開けると、白い騎士が兜を外して歩いていた。

「ヴァイス・・・？」

「ん？ おお・・・起きたか」

嬉しそうに笑うヴァイス。ダメ。ダメだ俺。

浮気はダメ。しかも俺は男。おk？ 俺。俺は男。

「さっきヴィータ副隊長がロストログアをぶっ壊したらしい

そろそろ元に戻るってよ。さっき連絡が来たぞ？」

「そ、そっか」

なんたる・・・ヴァイスは泣きそうな目で・・・。

わかってる。わかってるんだ。ヴァイスが俺の事を好きだったことくらい。

気付くシーンは何度でもあった。

例えば、いつもの5人でのバー。

例えば、一緒にご飯を食べる時。

例えば、一緒にシャワーへ行く時。

同じ曹長って階級だからじゃ理由の付かない事もした。

でも、俺にはシグナムが居て、アルフォンスっていう息子が居て・・。
・。

「・・・お前は・・・元に戻っちまうんだな・・・」

ヴァイスは俯き前髪で表情が見えなくなった。そして俺を地面へ立たせる。

腰が抜けてしまっているのか上手く立てずに女の子座りする俺は、

その場から歩き出したヴァイスを呼び止めて・・・――

「来るな!!」

「っ!？」

拒絶。背中を俺に向けたままヴァイスは・・・

「・・・お前はさ・・・下手な美女よりも綺麗だよ。

・・・ああ、そうだよ。初恋だったさ・・・お前がな。

だけどそのすぐ後にぶっ壊されちまうんだが・・・笑えるだろ？

お前が女になった時・・・戻したくないって思ったんだ」

「・・・!」

「俺達は男で・・・まあ、俺にもそんな属性無かったしさ。

スッパリサッパリ気持ちが悪くなった・・・けどよあ」

ヴァイスはこちらへ向き、俺に目線を合わせた。

「なんで女になっちまうかなあお前は・・・」

「ヴァイス・・・」

「なんで女じゃねーのかなあ俺は・・・」

「俺・・・俺は・・・」

「なんで・・・お前は女じゃねーのかなあ・・・!」

体が淡い粒子に包まれていく。タイムリミットが来たんだろう。

「ねえ・・・ヴァイス・・・」

涙を流すヴァイスに話しかける。

きっと、彼は涙を流す理由もわからないんだろう。

$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ h \\ \vdots \end{array} \right]$

だから。

「守ってくれてありがとう。私の騎士様」
ナイト

愛してあげることはいけないけど。

「大好きだよ。ヴァイス」

こうして、機動六課のTS事件は幕を閉じた。

六課の設備の惨状は元に戻ったエリアが修復している。

アルもお手伝いを行い時間軸を元に戻す作業を行ったそうぞ。

たく・・・今回の件は内密に処理されることになったが、

アルが監視カメラごと設備の時間を巻き戻したおかげで・・・。

ああ、わかってるんだろ？

六課のほぼ全員が監視カメラの映像を見たらしくてな・・・。

しばらく主犯格と被害者に・・・ヒーローは顔真っ赤だったな。

・・・は？ お、おお！ シグナムか？ あいつはなあ・・・。

・・・あいつの部屋の前通ればいやでもわかるぞ。

「・・・なあ・・・アリア・・・」

「な、何かなシグナム・・・」

「私の耳がおかしくなったんだよな」

「そ、そうかもね！ 病院行ったほうがいいかも・・・！」

『・・・んっ・・・守ってくれてありがとう。私の騎士様。』

愛してあげることが出来ないけど、大好きだよ、ヴァイス』

「・・・」

「・・・お仕置きだ」

「ごめんなさい！！ ごめんなさい！！」

「とりあえず・・・」

「え、あ、や・・・んむっ・・・」

「・・・」

「ぶあっ・・・え、縄縛っちゃだあ！」

「・・・」

「ご、ごめん！ ごめんなさい！ シグナム・・・っ！」

——ガシャン

「首輪に」

「え、あっ！」

——ギリギリギリッ！！

「ロープ・・・ッッ!」

「痛いっ! 痛いいい・・・っっ!」

——ぐりんっ

「もっあ・・・っ」

「猿轡に目隠し・・・あとは・・・」

・・・カチッ!

ヴィィィィィィィィィィン・・・

カチッ!

「ん————!!! むああ————!!!」

「胸に二つ、あそこに四つ、穴に一つ付けて生殺しにしてやる。

明日から二日間休暇だ・・・とりあえず一日は放置だな」

「——」

「私は今日、夜勤から一日出張だから丸24時間いないのか。

頑張れよアリア。今からお仕置きの間だ……じゃあな」

カチツカチツカチツカチツカチツカチツカチツ！！

「んー！！！！」

ま、まあこうゆうことだ……っと……。

・
・
・
行つたか？

あ、あぶねえ……。見つかる所だったぜ……。

あ？
アリアを助けないのかって？

・・・ノーコメントだ。オラ仕事行くぞ!!

めでたし、めでたし・・・？

番外編3話 機動六課、エクステンジ！ 後編。（後書き）

アリア君は感想板に出現できません。ご了承ください。

番外編4話 300万PV記念 10year 1(前書き)

本編300万PV、本当にありがとうございます。

Stsから10年後の話をお届けしようかと思います。

そう。アルフォンスが高校生の時期ですね。

Stヒルデに高等部があるの？

とか、そういう類の突っ込みはご勘弁をw

飽くまでお祭りの要素を含む番外編です。

それがよろしい方だけどうぞ。ちゃんと警告しましたよ？

「・・・んう」

むくり。という音が一番似合いそうな感じで僕は体を起こした。

くあああとあくびを一つかまし、きよろきよろと周りを見る。

そしてんーっ・・・と体をうんと伸ばす。

ふっと脱力して窓の外を見ると、日光が差しかけていた。

「・・・今日も学校か・・・」

いつもはStヒルデの高等部に通い日々勉強に励む僕。

先週、高等部に入学。そして入寮したばかりだ。

一週間程でホームシックなど彼は感じない・・・が。

文学を専攻している僕には最近悩みが一つだけあった。

響く寮室のチャイム。そしてカギをこそごとと開ける音。

ガチャツとドアが開き、金色のサイドポニーの少女が入室する。

「おはようっ 今日私か・・・」

そう。僕ことアルフォンスの目下の悩みは・・・。

「服着てよあーちゃー………んっ！？／／／」

今日の前で顔を真っ赤にしてる文系魔法的格闘少女な幼馴染だ。

ああ……申し遅れました。僕の名前はアルフォンス。

アルフォンス・ムーンライト・八神、15歳です♪

ちよつと覗いて見てみよう。

未来がどうなってるのか気にならない？

これは、アルフォンスが高校生になったお話。

さあ、未来の話を始めよう。

S t ヒルデ魔法学院高等部・教室棟4階廊下。

「も、もっつ！ あーちゃん、あんな格好してたら風邪引いちゃうよ！」

「うーむ。僕はそんなに気にならないんだけどな。うん」

「私が気にするの！ ね？ クリス、はーちゃん？」

『・・・きゅつきゅつ（こくこく）』

『私も概ね賛成ですね。朝からシーツ一枚とは感心できません』

「えー。暖房効かせてるし服着ないほうが絶対楽だよー・・・」

「ダメったら絶対ダメ！ わかった？」

「考えとくよ・・・」

「もー・・・」

今、僕達は二人で教室へ向かってる途中だったりする。

今日の授業は一般教養と魔法学とその実習。

午後は僕達が戦国無双できる授業、ストライクアーツだ。

「おはよ。コロナ、リオ」

「アルにヴィヴィオちゃん、おはよっ」

「あ、二人ともおはよう」

3人娘の仲はいまだ健在。かなり綺麗どころなメンツ。

周囲の男子生徒の無言の視線と無言の殺意で、余裕で死ぬる。

僕の容姿？・・・えと、普通の金髪ショートカットの男だけど。

まあ、髪型も女の子だし顔も父さんの遺伝か女の子顔だけど、

雰囲気でした。かなり強い男の子。て事をイメージさせてるはず。！！！！

ふんす。と鼻息を吐き両手で控えめにガッツポーズ。

「いやいや。思いつきり女の子だから」

「ええええっ！？」

ぐぬぬ
・
・
・
ぬぬぬ
ぬぬぬ
ぬぬぬ
・
・
・
。

「寧ろ男の子みたいになるのってバリアジャケット展開した時の、

「あはは。ありがとコロナ」

「黒い片袖に半分の腰飾りに、がんばれーど・・・だっけ？」

「それは本気の時だけだよオ」

僕が本気を出すのは基本的にストライカー、エースと言われる人達だけだ。

だから普段の戦闘は・・・はーちゃんはバリアジャケットオンリーだ。

「普段あーちゃんはザンガンアーツだもんねー」

「それ以前にアル君は本気を私たちに出した事ないもんね」

コロナの言葉にあははと苦笑いする。ジト目がキツツイです。

するとグットタイミングで・・・ホームルームを知らせるチャイム。

僕達は急いで教室へ駆け込んだ。

side ヴィヴィオ

こんにちはっ！ 高町ヴィヴィオですっ

うーむ。お祭りのな300万PV記念だけどゆっくりしていったね
！！！！

「ヴィヴィオ、ほら、僕達は別枠だよ？」

「え、あ、うんっ」

今はお昼をわいわい食べた後、ストライクアーツ二時限分。

正直お昼の後すぐに動くのは体に悪い気がする。あーちゃんが前に
言ってた。

私は他のクラスメイトとは別に、一組で1コート使わせてもらう。

リオ、コロナを含む他の皆は先生の説明を受けている。

ん？ 男子も一緒だよ？ 元々男子はこのクラスに数人だし。

模擬戦をやるならこのコートじゃ足りないけど・・・今は授業だし。

「行くよ、ライオンハート、大人モード訓練着で」

「私も一緒をお願い。クリス」

いつも通りの戦闘形態。私たちは軽くウォームアップしてと。

「おい高町、八神。いいか？」

「「はい？」」

二人で背中合わせになって、腕を組んで片方が前屈する・・・

なんだっけ、えと・・・あれをやってる最中、先生が近くへ来ていた。

私はあーちゃんを降ろして二人で聞く姿勢に。

「今日はお前達に模擬戦に近い事をして欲しいんだが・・・」

「へ？」

「授業の中でお前達の模擬戦を見たいと言った者が居たからな。

『模擬戦に』近い事をしてほしいと私も思ってた・・・」

うーん、実戦じゃなくて模擬戦に近い事ね・・・。

「わかりました。ヴィヴィオは？」

「——当然！」

ガンツと両拳を打ち付ける。

「じゃあ、ヴィヴィオ。久し振りにやろつか」

「うんっ」

私とあーちゃんが向き合い、拳を構えた。

「手加減しないでね？」

「無理」

「・・・残念」

「ごめんね？」

わかってる。いつもの冗談だ。

あーちゃんの戦闘力はお兄ちゃんを軽く超える。

手加減しないと私は消し炭になってしまっただろう。ものの数秒で。

・・・だから、私は全力。

あーちゃんは私の数段上にレベルを設定してくれるかな。

『はじめ!!』

「先手、必勝」

突然目の前に出現したあーちゃんをポカンと見つめる。

空中で繰り出された豪快な旋風脚をわずかに重心を後ろにずらして回避。

そしてそのまま宙返りして爪先をあーちゃんの顎へ叩き込む。

だが予測されていたのかあーちゃんは私から距離を取った。

「そこだ!!」

『ジェットステップ』

「うおおっ!？」

ストレートを見舞うもあーちゃんはブロック。

そのままサイドヘシフト。あーちゃんを補足し拳を叩き込んだ。

・・・が。

「うーん。チェックメイト」

「ウソっ!？」

ブロックの姿勢の横っ面を間違はなく穿ったと思った私の拳は、

綺麗にあーちゃんの頭上を通り過ぎていた。

あーちゃんはしゃがんだ体勢から一回転して・・・。

——アレが来るっ!!!

一回転したお陰で何が来るのか分かったし、

カウンターを当てる姿勢も整えられた。

あとは見切るだけ・・・っ!!!

「ザンガン流奥義、『バーニングアロー』」

キュゴオオツッ!!!

炎の変換属性持ちじゃないのに炎を纏った亜高速の突進蹴り。

そしてそんなデタラメすぎて顎をが緩まるような技を受けた私は、
人体からでちゃいけない擬音がして、視界を空へ移した。

これが高校生になった私達の日常。毎日が本当に楽しすぎて。

私がお世話になった人達よ。『ヴィヴィオ』は今日も元気に。

「空を舞っていますよー・・・」

これを含めて、10年後のお話。

splendid future
10 year Revolutionary
lantern / The

番外編4話 300万PV記念 10year 1(後書き)

まず、その1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7406t/>

魔法少女リリカルなのは 純 姫 番外特集 ♪

2011年11月24日17時49分発行